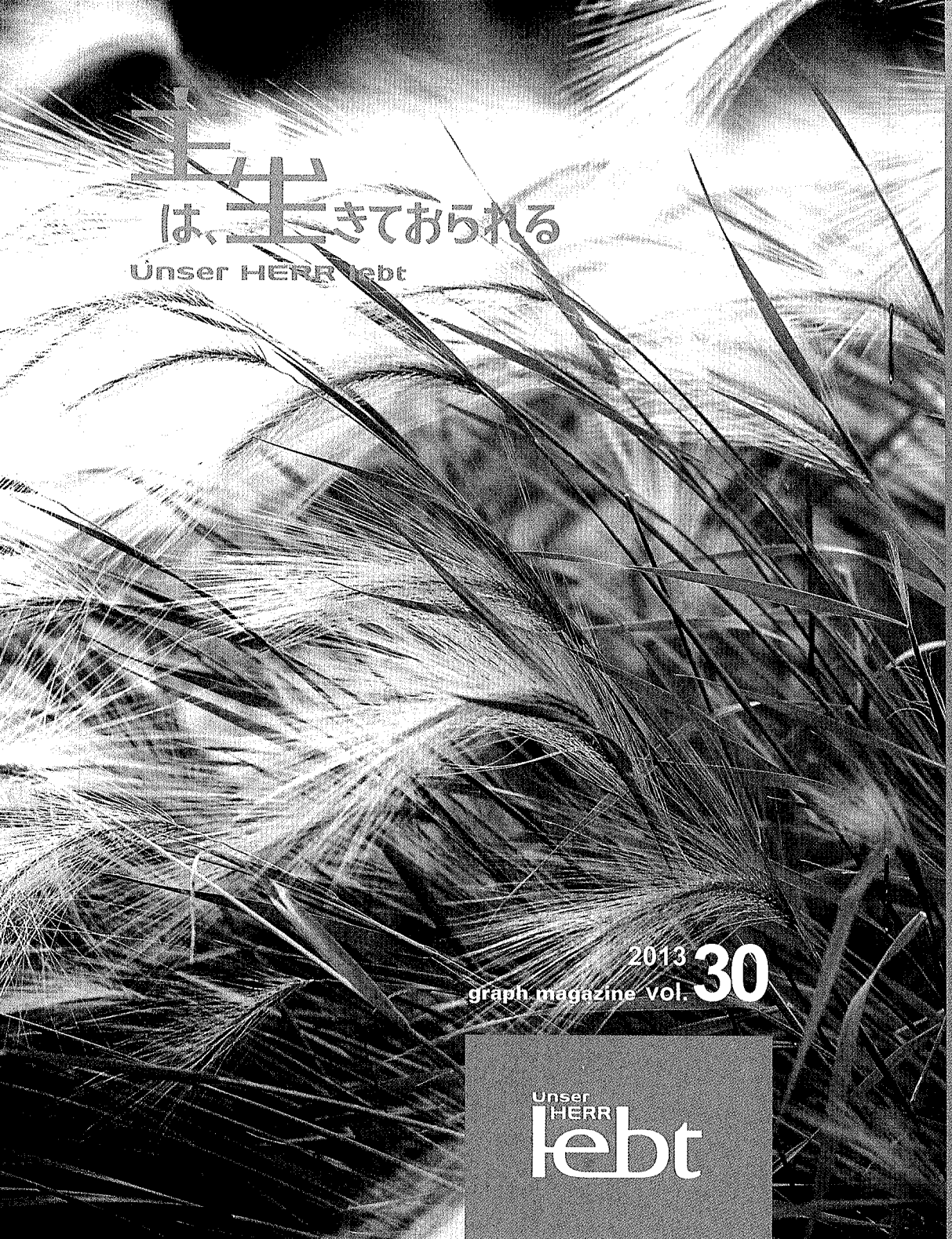

は、生きておられる
Unser HERR lebt
2013
graph magazine vol. 30
Unser HERR lebt

Unser HERR lebt

は、生きておられる

まことに、まことに、あなたに告げます。
人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。（ヨハネ3・3）

vol. 30 定価100円（本体95円）

メッセージ

4 キリスト者の使命(2)主の「賞」を得るための戦い　ゴットホルド・ベック

12人の証し

14 主の導き　小橋とも

21 キリストの力は弱さのうちに　米倉真樹

27 信じて待ちます　米倉恵子

30 私の心は主に拠り頼み、私は助けられた　安田友子

40 イエス様以外に救いはありません　永川誠

47 測り知れぬ主の恵　永川智子

52 主イエス様が与えてくださった平和で穏やかな生活　藤田瑛二

58 みことばの戸が開いて光が差し込むと　藤田恭子

65 主のあわれみは尽きません―わがまま放題の果て　井上俊之

73 神のわざがこの人にあらわされたのです―わがままをこじらせて　井上衣里子

81 咎を砕かれ最善の導きへ　松本昭二

88 憐れんでくださるイエス様　松本真知子

キリスト者の使命　(2)主の「賞」を得るための戦い

ゴットホルド・ベック

主イエス様を体験的に知ることこそ、人生において最も大切なことです。救いの神を知ってはじめて、私たちは真実に満たされた生活を送ることができるようになります。人生は、生きておられる神との出会いがあり、罪の赦しを確信して神様との間に平和が保たれ、永遠のいのちをいただいてこそ幸いです。日々、主イエス様に愛され、導かれ、そして守られているという確信が生活の土台になくてはなりません。また、死んだ後も主イエス様と永遠に交わりをもち、栄光をともにできるという確信は、最高の宝物です。いつまでも主とともにいる、という事実について考えると主を礼拝せずにはいられません。神の恵みによって信仰をもち、「神の子ども」とされてからも、主イエス様を体験的に知り続けていくことはとても大切です。

それは私たちがこの地上において、主のために用いられる器となるためです。そこで、前回に引き続き、キリスト者の使命、つまり、私たちが救われたのは何のためかもう一度聖書から考えてみたいと思います。パウロも「エペソ人への手紙」の中で言っています。

私たちがみな、信仰の一致と神の御子に関する知識の一致とに達し、完全におとなになって、キリストの満ち満ちた身たけにまで達するためです。（エペソ　4・13）

パウロがみことばを宣べ伝えた目的は、幼いままの「乳飲み子」の兄弟姉妹の世話をすることではなく、人々が「まったき人」となるよう御霊によって励まされることでした。神の恵みにより信仰をもって救われた兄弟姉妹が、「永遠の勝利の冠」を得るために生きていくようパウロは常に祈っていたと言えます。

1　競走・拳闘・格闘技

新約聖書の中では、この地上における競技と、私たち信者の霊的・信仰的な戦いとが対比されています。それは私たちの信仰を励ますためであります。そこで三つのギリシャ・ローマ時代の競技である競走、拳闘、格闘技についてどのように描かれているか見てみましょう。中でも競走に関して多く述べられているのは意味のあることです。走者がゴールを目指して走るのと同様に、私たちキリスト者もまた前にある主の目標、キリスト・イエスにおいて召してくださる神の「賞」を得ようと努めています。

キリスト・イエスにおいて上に召してくださる神の栄冠を得るために、目標を目ざして一心に走っているのです。（ピリピ　3・14）

拳闘は、私たちの戦いが、自分自身の中にいる敵に対するものであることを示しています。みことばは次のように言っています。

競技場で走る人たちは、みな走っても、賞を受けるのはただひとりだ、ということを知っているでしょう。ですから、あなたがたも、賞を受けられるように走りなさい。また闘技をする者は、あらゆることについて自制します。彼らは朽ちる冠を受けるためにそうするのですが、私たちは朽ちない冠を受けるためにそうするのです。ですから、私は決勝点がどこかわからないような走り方はしていません。空を打つような拳闘もしてはいません。私は自分のからだを打ちたたいて従わせます。それは、私がほかの人に宣べ伝えておきながら、自分自身が失格者になるようなことのないためです。（1コリント　9・24～27）

格闘では、私たちの外にある「闇の力」が戦いの標的であることを教えています。次のみことばはよく知られています。

私たちの格闘は血肉に対するものではなく、主権、力、この暗やみの世界の支配者たち、また、天にいるもろもろの悪霊に対するものです。（エペソ　6・12）

このように三種類のスポーツは、私たちキリスト者の戦いの三つの異なった精神的な方向を示唆しているのです。

競走についてさらに考えてみます。競走が意味している最も大切な真理は、「すべての走者はゴールに到達することができる」というものです。したがって主の力をもって、御旨に従い私たちもまた目標に達することができるのです。

すべてのキリスト者は力の限りを尽くし、目標を目指して、急いで走らなければなりません。枝葉のことに目を奪われて目標から離れてはなりません。的外れな生き方をしてはなりません。

すべてのキリスト者はゴールインするまで走り続けなければなりません。途中で疲れたと言ってやめてしまうことは許されません。休みなく前進すべきであって、立ち止まることは許されません。敵は私たちを倒そうとします。しかし、主イエス様は私たちを守ることがおできになります。ですから、つまずかないように、また倒されないように走らなければなりません。

すべてのキリスト者は常に最高のものを得ようと望むべきです。そうした時にはじめて、主イエス・キリストの栄光の冠を得る恵みに与れるのです。キリスト者が得る報いについて聖書は次のように語っています。

このようにあなたがたは、私たちの主であり救い主であるイエス・キリストの永遠の御国にはいる恵みを豊かに加えられるのです。（2ペテロ　1・11）

なぜなら、私たちはみな、キリストのさばきの座に現われて、善であれ悪であれ、各自その肉体にあってした行為に応じて報いを受けることになるからです。（2コリント　5・10）

今からは、義の栄冠が私のために用意されているだけです。かの日には、正しい審判者である主が、それを私に授けてくださるのです。私だけでなく、主の現われを慕っている者には、だれにでも授けてくださるのです。（2テモテ　4・8）

パウロは救われた兄弟姉妹の成長と聖（きよ）めの必要性、信仰の戦いの重要性を教えるために、キリスト者の戦いを競走になぞらえて説明しました。そして彼自身も走り続けました。

私は勇敢に戦い、走るべき道のりを走り終え、信仰を守り通しました。（2テモテ　4・7）

けれども、私が自分の走るべき行程を走り尽くし、主イエスから受けた、神の恵みの福音をあかしする任務を果たし終えることができるなら、私のいのちは少しも惜しいとは思いません。（使徒　20・24）

こういうわけで、このように多くの証人たちが、雲のように私たちを取り巻いているのですから、私たちも、いっさいの重荷とまつわりつく罪とを捨てて、私たちの前に置かれている競走を忍耐をもって走り続けようではありませんか。信仰の創始者であり、完成者であるイエスから目を離さないでいなさい。イエスは、ご自分の前に置かれた喜びのゆえに、はずかしめをものともせずに十字架を忍び、神の御座の右に着座されました。（ヘブル　12・1～2）

これらのみことばは、目標を意識することと、上のものを求めることの大切さを示しています。一人の人の生涯において、その人がどんなことを考え、どんな目的をもっているかということこそ決定的なものとなります。内面的な態度および姿勢からその人全体の外面的な行いも決定されます。

2　上にあるものを思う

主イエス様は、私たちの人格そのものを新しいものに造り変えたいと願っておられます。主イエス様は、考え方、見方、価値観を変えてくださいます。しかし、このような本当の意味の人間革命、すなわち人が造り変えられるためには、その人の内面的な決断、心の向かうところ、考えや求める気持ち、これらが「上にあるもの」、すなわち永遠なる主イエス様ご自身に向けられていることが大切です。聖書は言っています。

こういうわけで、もしあなたがたが、キリストとともによみがえらされたのなら、上にあるものを求めなさい。そこに

はキリストが、神の右に座を占めておられます。あなたがたは、地上のものを思わず、天にあるものを思いなさい。

（コロサイ　3・1～2）

上にあるものを思う兄弟姉妹は、主なる神が自ら啓示される泉、すなわち主イエス様を愛しています。

上にあるものを思う兄弟姉妹は、自分のいのちの泉であられる主ご自身と個人的に祈りの交わりをもっています。

上にあるものを思う兄弟姉妹は、目まぐるしい生活の中にあっても、常に静かな祈りと平安の中にいることができる人々です。

上にあるものを思う兄弟姉妹は、ときどき祈るのではなく、絶えず祈り、絶えず感謝しているのです。

上にあるものを思う兄弟姉妹は、上にあるものを見上げることによって、主が私たちを導いてくださるようにと願っているのです。

上にあるものを思う兄弟姉妹は、この世においても誠実で良心的な行いの模範者であり、主イエス様の栄光が明らかにされることを心から待ち望んでいる人々です。

上にあるものを思う兄弟姉妹は、地上においても責任を果たしていますが、その本当の目的は天にあります。

上にあるものを思う兄弟姉妹は、主イエス様を愛し、主のみことばである聖書を愛する者に他なりません。主と主のみことばを愛する人の生活には、虚（むな）しく意味のない日は一日もありません。そういう兄弟姉妹は、聖書を通して主イエス様が毎日自分に語りかけてくださることを求めています。聖書全体は信仰といのちの動かない土台です。主のみことばの全体が、上にあるものを思う兄弟姉妹にとっては「約束」と「戒め」であり、主イエス様の「賜物」と「使命」であり、生き生きとした力と喜びを与えるものであり、人生の正しい方向を指し示すものです。上にあるものを思う心と、聖書を読む喜びとは相伴うものです。

すべてのみことばは天からの賜物です。ですから、聖書を読むことをおろそかにしたり、みことばを聞くための主にある交わりをもつことを怠る人は、地上のことだけを思い、霊的に貧しくなり、この世の力に支配され、上よりの召しを拒むようになってしまいます。

上にあるものを思わない兄弟姉妹は、最後まで競走を走り通すことができません。目標を目指して走る代わりに、右を見たり、左を見たりしながら、結局はいつも同じような状態にとどまらざるを得なくなります。

けれども、上にあるものを思う兄弟姉妹は、夜も昼もみことばを思い、みことばを喜ぶ者としてどんなに祝福されることでしょうか。

幸いなことよ。悪者のはかりごとに歩まず、罪人の道に立たず、あざける者の座に着かなかった、その人。まことに、その人は主のおしえを喜びとし、昼も夜もそのおしえを口ずさむ。

（詩篇　1・1～2）

上にあるものを思う兄弟姉妹は、主の掟（おきて）のうちにある、奇しいことを見るようになります。

私の目を開いてください。私が、あなたのみおしえのうちにある奇しいことに目を留めるようにしてください。

（詩篇　119・18）

また大きな獲物を得た人のように、主のみことばを喜ぶようになります。

みことばのすべてはまことです。あなたの義のさばきはことごとく、とこしえに至ります。・・・私は、大きな獲物を見つけた者のように、あなたのみことばを喜びます。

（詩篇　119・160、162）

主のみことばを通して、新しい力が、上にあるものを思う兄弟姉妹の中に入って来るのです。上にあるものを思う兄弟姉妹の目は上に向けられ、目標に向かって全力で前に進みます。この競走の最後には勝利が待ち受けています。主イエス様が再臨される時にその勝利は明らかになります。

キリスト者の使命　（2）主の「賞」を得るための戦い

3 主によって完全に捕えられる

ですから、あなたがたは、心を引き締め、身を慎み、イエス・キリストの現われのときあなたがたにもたらされる恵みを、ひたすら待ち望みなさい。（1ペテロ　1・13）

心を引き締め、身を慎む兄弟姉妹は、絶えず目をさまし、主イエス様を待ち望んでいます。「心を引き締める」とは、完全に、徹頭徹尾、主の恵みを信頼することを意味します。「恵み」は、人間の行いとは全く異なる次元で、主イエス様が私たちのためになしてくださることです。したがって本当の競走者とは、100パーセント主イエス様の恵みを信頼して走る者です。自分自身の力に頼らず、ただ主イエス様が明らかにされる目標だけを目指して走るのです。

私たちの国籍は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主としておいでになるのを、私たちは待ち望んでいます。キリストは、万物をご自身に従わせることのできる御力によって、私たちの卑しいからだを、ご自身の栄光のからだと同じ姿に変えてくださるのです。（ピリピ　3・20～21）

私たちは意識して、永遠なる一つの目標だけに思いを集中していなければなりません。もし、目標が一つに定まっていなければ、主から与えられた御力をもって目標に向かって前進することはできません。パウロは「キリスト・イエスにおいて上に召してくださる神の栄冠を得るために、目標を目ざして一心に走っている」（ピリピ　3・14）と証ししました。

パウロのこの証しについて考えましょう。パウロはまず第一に、競走者の「召し」について語っています。その「召し」は、ただ主イエス様お一人だけによるものであり、すべてのことは主イエス様を通してなされます。

私は、人間的なものにおいても頼むところがあります。もし、ほかの人が人間的なものに頼むところがあると思うなら、私は、それ以上です。私は八日目の割礼を受け、イスラエル民族に属し、ベニヤミンの分かれの者です。きっすいのヘブル人で、律法についてはパリサイ人、その熱心は教会を迫害したほどで、律法による義についてならば非難されるところのない者です。しかし、私にとって得であったこのようなものをみな、私はキリストのゆえに、損と思うようになりました。（ピリピ　3・4～7）

第二にパウロは、競走者の霊的な目的はイエス様であり、競走はただ主イエス様のために行われると証しています。

私の主であるキリスト・イエスを知っていることのすばらしさのゆえに、いっさいのことを損と思っています。私はキリストのためにすべてのものを捨てて、それらをちりあくたと思っています。それは、私には、キリストを得、また、キリストの中にある者と認められ、律法による自分の義ではなくて、キリストを信じる信仰による義、すなわち、信仰に基づいて、神から与えられる義を持つことができる、という望みがあるからです。（ピリピ　3・8～9）

第三に、競走者の努力と力は、主イエス様と共に上に召してくださる主の「賞」を得るために注がれていると証しています。

私は、キリストとその復活の力を知り、またキリストの苦しみにあずかることも知って、キリストの死と同じ状態になり、どうにかして、死者の中からの復活に達したいのです。私は、すでに得たのでもなく、すでに完全にされているのでもありません。ただ捕えようとして、追求しているのです。そして、それを得るようにとキリスト・イエスが私を捕えてくださったのです。兄弟たちよ。私は、自分はすでに捕えたなどと考えてはいません。ただ、この一事に励んでいます。すなわち、うしろのものを忘れ、ひたむきに前のものに向かって進み、キリスト・イエスにおいて上に召してくださる神の栄冠を得るために、目標を目ざして一心に走っているのです。（ピリピ　3・10～14）

第四に、競走者が待ち望んでいることは、いつまでも主イエ

キリスト者の使命　(2)主の「賞」を得るための戦い

ス様といっしょにいることだと語っています。

主イエス様によって完全に捕えられていることこそ、キリスト者のあらゆる力の秘訣です。主イエス様によって捕えられた者だけが、真の目標をとらえるようになります。パウロは「私は、すでに得たのでもなく、すでに完全にされているのでもありません。ただ捕えようとして、追求しているのです。そして、それを得るようにとキリスト・イエスが私を捕えてくださったのです」と言っています。

4 勝利を得る

あらゆる勝利は主に属する者を前進させます。耐え忍んだすべての試練により、兄弟姉妹の信仰は強くされます。主イエス様の助けを体験した人はその喜びを増し加えられるのです。

ある神学校でのことを話しましょう。学生たちは「全能の主なる神と悪魔」というテーマで論文を書くことになりました。与えられたのはわずか四時間で、論文は第一章「全能なる神」、第二章「悪魔の存在と本質」、第三章「全能なる主と悪魔との関係」の三つの部分に分けて書くよう課せられました。学生たちは当然、悪の発生とそれが許されていることの問題、この悪を主なる神がご支配なさって光の国により闇の国が支配されることなどについて書くと思われました。

しかし一人の学生は、主なる神の全能と偉大さ、愛、知恵、真実、善、そして憐れみなどについて夢中になって書いたのです。そして突然、終わりの時間がやってきました。彼は、始めから終わりまでただ主イエス様のことについてだけ書き続け、その論文は感謝と喜びに満ちた内容になっていました。終了時間になったとき、「悪魔に時間なし」と書いて論文を出したそうです。先生がその学生に対してどんな評価を与えたかは分かりません。しかし、私たちは「悪魔に時間なし」ということばから多くのことを学び取ることができます。

私たちの心が本当に主イエス様によって満たされているならば、悪や悪魔が入り込む余地は全然ありません。そのとき私たちの心は、いわば主の領土のようなものです。罪やこの世のものはまったく力を失い、私たちは上からの使命と目標を持つようになります。

私たちの心が主イエス様によって満たされているなら、私たちの時間は主のものとなります。主イエス様を喜ぶことは、私たちを囲む要塞のようなものとなります。主イエス様が私たちを捕えてくださればくださるほど、罪はその力を失います。私たちが主イエス様のための時間を多く持てば持つほど、私たちの敵である悪魔のための時間はますます少なくなります。「悪魔に時間なし」です。

ドイツのケルンにある画廊に、大きな油絵があります。それは旧約聖書に出てくる士師記のサムソンを描いたものです。それを見ると、サムソンは細い紐で縛られ、小さな子供がその紐を持って巨人サムソンを導いています。そのサムソンの髪の毛は切り落とされて大地に落ちています。この髪の毛はサムソン自身がすべての生活を主に捧げたことの証明となるものでした。けれど今、サムソンは罪によって霊的な力を失ってしまっていたのです。いかに小さな罪でも、罪を犯した者は悪魔に縛られてしまうのです。ただ主にすべてを捧げ尽くすことが本当の力の秘訣です。ただ主イエス様との霊的な交わりだけが私たちを勝利の生活に導くのです。

キリスト者の使命　(2)主の「賞」を得るための戦い

主はその御目をもって、あまねく全地を見渡し、その心がご自分と全く一つになっている人々に御力をあらわしてくださるのです。　(2歴代　16・9)

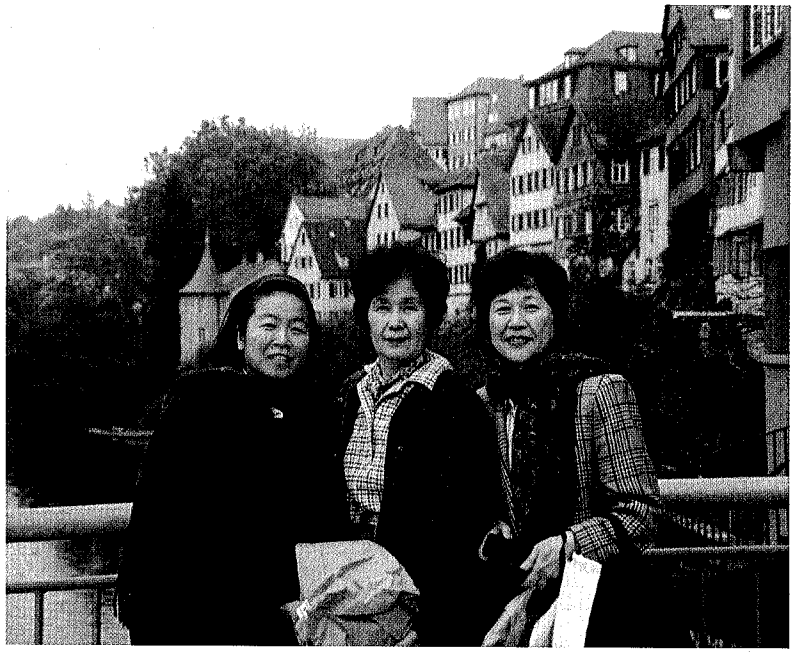
勝利を得たいと思う兄弟姉妹は、すべてを主イエス様に明け渡さなければなりません。自分自身をまったく主イエス様にゆだねた者だけが、本当に恵まれ祝福されます。

競走者の真の生涯は、焦点を二つ持った楕円、つまり生活の中心が自分自身とイエス・キリストにあって、その間を往(い)ったり来たりするようなものではなく、主イエス様というただ一つの中心しかない、円のようなものです。このような真の競走者としての生涯を全うさせていただけるよう、主に心から祈りたいものです。

また、御子はそのからだである教会のかしらです。御子は初めであり、死者の中から最初に生まれた方です。こうして、ご自身がすべてのことにおいて、第一のものとなられたのです。　(コロサイ　1・18)

主の導き

小橋　とも



右が小橋さん、みなさんと

私は一九九六年十一月に、先に集会に集っていた姉に願って連れてきてもらい、初めて礼拝に出席いたしました。翌年一九九七年秋にスイスでの喜びの集いに参加したとき、ベックさんは次のみことばを引用されました。

主からエレミヤにあったみことばは、こうである。「立って、陶器師の家に下れ。そこで、あなたに、わたしのことばを聞かせよう。」私が陶器師の家に下って行くと、ちょうど、彼はろくろで仕事をしているところだった。陶器師は、粘土で制作中の器を自分の手でこわし、再びそれを陶器師自身の気に入ったほかの器に作り替えた。それから、私に次のような主のことばがあった。「イスラエルの家よ。この陶器師のように、わたしがあなたがたにすることができないだろうか。――主の御告げ。――見よ。粘土が陶器師の手の中にあるように、イスラエルの家よ、あなたがたも、わたしの手の中にある。」

（エレミヤ　18・1～6）

ベックさんが「どんなに悪い土でできた器でも、主は作り直すことがおできになる」とおっしゃったのを伺って、こんなどうしようもない者でもいいのだと安堵（あんど）したことを覚えております。

私は、一九四五年の終戦直前、母の疎開先で四姉妹の末っ子として生まれました。現在六十七歳になります。結婚はしておりません。独身主義を通したわけではなく、結婚に踏み切る勇気がありませんでした。また、互いによいと思う相手に恵まれなかったせいでもあります。

両親、とくに母は家庭内の言動に厳しく、また学校の成績を重視しておりました。父母ともに親族の問題を抱えており、母はいらいらしていることが多く、私はいつも母の機嫌（きげん）を伺（うかが）っていました。私は学校の勉強が嫌いでしたし、注意力散漫で、機転がきかない、母にとって大変はがゆい子だったようです。父母は交際範囲が狭く、気持ちを聞いてくれる人もいませんでしたので、いつもなんとなく不安でした。

勉強は嫌いでしたが、読書は好きで、というより本の世界に逃げていたのだと思います。岩波少年少女文庫や、偉人伝、また、父が購読していたリーダーズダイジェストの日本語版を読んでおりました。その中には、難病にかかった方や重い障害を負った方が、かえって周囲を明るくし、力づける話が毎号のように載っていました。私は、本の中の人物と両親や先生方、周囲の大人を観察し較べて落胆し、尊敬・信頼できる人に巡り会いたいと渇望するようになりました。

母は、女学校時代、キリスト教系の学校に通っていまして、戦後、友人に誘われて教会に集っておりました。私は幼稚園から日曜学校に行かされ、小学校低学年のときに多摩川で洗礼を受けさせられました。でもその教会にいろいろ疑問を抱くようになり、中学ごろには、ほとんど行かなくなりました。

中学三年のとき、私の成績に関して母がもはやなにも期待していないと思わされることがあり、それ以来、試験前以外はほとんど勉強しなくなり、成績はどんどん下がり、劣

等感だけ膨(ふく)れ上がるようになりました。こうして、私はかたくなで疑い深く、プレッシャーに弱い、悲観的な性格になっていきました。

なんとか大学を卒業し、自立したくて会社勤めを始めましたが、同僚と自分を比較し、劣等感に悩まされ、社会性に乏しいために苦しい毎日でした。私がいた部署は、非常に忙しく深夜まで仕事が続くことがよくあり、また、上司に振り回されることもあって、三十歳ごろに退職いたしました。

そのころは父が亡くなり、姉三人は結婚して、母と二人暮らしになっていましたが、将来に希望を見出せない生活を送っていたある日、突然どうしようもない不安が襲ってきて押しつぶされそうになり、庭に飛び出しました。パニック障害の症状でした。半年ほどひどい状態が続いたのち、原因は社会との接触がないからではないかと考え、仕事を探して勤めを再開したところ、だんだん直っていきました。勤務先は海外向けの英語の単行本を発行している財団法人でしたが、六年ほどで発展的解消をするということで、私は失業し、新しい職場に移り、そこも非常に忙しいところでしたが、自分に合った仕事を得て働き続けました。

私が働いている昼間、高齢の母は一人でいることが多かったため、一番上の姉の一家が移り住んできてくれました。母は、その後、ころんで大腿骨を骨折し、長期入院した後、だんだん具合が悪くなり、八十五歳で亡くなっております。母が亡くなる半年前に私は家を出て、一人暮らしを始めました。

一人の生活を自分で調整して送っているつもりでしたが、五十歳のときに人事関係などさまざまな理由から再び勤めを辞める決心をしたときに、婦人科の手術と重なり、また不安が襲ってきました。そのときは、医者にかかり薬を飲みました。

手術のために入院していたとき、その三年くらい前から集会に集うようになっていたすぐ上の姉が、集会の証し集「光よあれ」を渡してくれましたが、かたくなだった私はざっと読んだだけで返しました。それでも、姉は根気よく「光よあれ」や「苦しみと感謝から生まれた讃美」のテープを渡してくれました。また、姉が集っていた青葉台の祈り会の方々が、私のために祈ってくださっていたと、後で知りました。

手術後、一人で家にいるとき不安に襲われ、何かにすがりたい思いが高まり、一九九六年の十一月、日曜礼拝に姉といっしょに集いました。そのときは、救われたという思いがこみ上げてきて、涙でぐちゃぐちゃになり、さっそく聖書を求めて読みふけりました。

その翌年の一九九七年秋に、初めてスイス喜びの集いに参加しました。

しかし、しばらくして精神的に落ち着いてくると、持ち前の疑い深さが戻ってきて、聖書を読んでも些細(ささい)な点に疑問を抱き、だんだん読まなくなりました。それでも集会から離れることはできずにいました。

スイスキャンプに集ってから二年後の初秋のころでしたが、毎朝、いいようのない不安のうちに目が覚めるようになり、不安に襲われるたびに、「不安を取り除いてください。平安をください」と祈り続けました。その願いがかなえられず、ある夜、不安がこうじて、いてもたってもいられなくなったとき、ふいにイエス様が四十日四十夜荒野にいらしたということが頭にひらめき、四十日でなにかをしてみよう、そうだ、聖書を通して読んでみようと思いました。さっそく、四十日だと一日何章読むことになるか計算しました。旧約・新約合わせて二八九章ですので、一日ちょうど三十章になります。そして、翌朝から読み始めて四十日経つといつになるかとカレンダーを見ましたら、読み終わる日の翌日がその年の十二月十一日の御代田の喜びの集いになっていたのです。

これは何かを与えていただけるに違いないという確信が湧き、聖書の内容の一覧表を作り、翌朝から一日三十章を、一章読んでは購入してあった榎本保郎氏の「一日一章」を併読するという形で読み始めました。読み続けて三週間ほど経ったある夜、その日の三十章を読み終えて、お風呂にぼんやり入っているときでしたが、風呂場が明るくなったように感じたのと同時に、「不安は恵み」ということばが頭に響きました。かたくなな私が降参してすべてを受け入れ、人の目を通してではなく、イエス様を直接見上げ、頼るようになるために、不安は与えられたのだと教えていただきました。

その日の三十章目は、よく読まれるイザヤ書41章でした。

恐れるな。わたしはあなたとともにいる。たじろぐな。わたしがあなたの神だから。わたしはあなたを強め、あなたを助け、わたしの義の右の手で、あなたを守る。あなたの神、主であるわたしが、あなたの右の手を堅く握り、「恐れるな。わたしがあなたを助ける。」と言っているのだから。

（イザヤ　41・10〜13）

風呂の中でうれし涙をぼろぼろ流し、翌朝、目が覚めたとき、不安がないのに気がつきました。その後も聖書を読み続け、読了した日の翌日、北町の姉妹の車に乗せていただき、御代田の別荘に泊まらせていただいて、喜びの集いに参加することができました。

小学生のころから、人が私をどのように見ているかということが気になり、知った人がだれもいないところに行ってやり直したいと考えることがよくありましたが、この経験をしたときは、私の自覚していないことも含めすべてをご存じの方がいらっしゃるということは、なんという幸いだろうと思ったものです。

わが子よ。主の懲らしめを軽んじてはならない。主に責められて弱り果ててはならない。主はその愛する者を懲らしめ、受け入れるすべての子に、むちを加えられるからである。

（ヘブル　12・5〜6）

それから二年経った真冬のころ、急に足が前に出にくくなっているのに気がつきました。しばらく蹴るようにして歩いていると治り、暖かくなって改善したため忘れていましたが、その後、症状が顕著になり、検査を受けました。

脊髄に問題があり、症状の進行は遅いものの、治療法はないということでした。発症してから十二年近く経った今は、かなり歩きにくく、バランスも取りにくくなっています。私の状態はもっと厳しい状態にある兄弟姉妹と比べれば、ずっと楽とは思います。けれども精神的に弱い者ですので、正直に言って、不安に襲われると、みこころに沿った祈りではないと思いながら、治していただきたいと主に訴えることがあります。そう祈っては、委ねなくてはと、みことばを自分に言い聞かせています。

すべての懲らしめは、そのときは喜ばしいものではなく、かえって悲しく思われるものですが、後になると、これによって訓練された人々に平安な義の実を結ばせます。

（ヘブル　12・11）

ベック兄はよく「交わりが大切」と言われますが、姉妹方との交わりを通して、試練の中にある方々や試練を通ってきた方々が、主イエス様からどのような導きをいただいていらっしゃるかを伺うことで、主の道からなんとか逸（そ）れないでいられるような気がいたします。

また、祈っていてくださる姉妹方がいらっしゃるということは、たいへん支えになり、感謝です。自分では、不安に襲われるときに間違った祈りをしてしまう者ですが、そんなとき、次のみことばに慰められ、イエス様に「ごめんなさい」と謝っています。

御霊も同じようにして、弱い私たちを助けてくださいます。私たちは、どのように祈ったらよいかわからないのですが、御霊ご自身が、言いようもない深いうめきによって、私たちのためにとりなしてくださいます。人間の心を探り窮める方は、御霊の思いが何かをよく知っておられます。なぜなら、御霊は、神のみこころに従って、聖徒のためにとりなしをしてくださるからです。神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。

（ローマ　8・26〜28）

キリストは永遠に存在されるのであって、変わることのない祭司の務めを持っておられます。したがって、ご自分によって神に近づく人々を、完全に救うことがおできにな

ります。キリストはいつも生きていて、彼らのために、とりなしをしておられるからです。（ヘブル　7・24～25）

問題を抱えて悩んでいらっしゃる兄弟姉妹とともに、主が光の道へ連れ出してくださることを願っております。

わたしは決してあなたを離れず、また、あなたを捨てない。（ヘブル　13・5）

これは、いつも支えていただいているみことばです。現在、私は難病に認定されている、脊髄小脳変性症のうちの痙性対麻痺、つまり両足が麻痺して、だんだん歩きにくくなるという病気で、杖をついております。武蔵野日赤の神経内科にかかっておりますが、これも主が、私が主に従うために与えてくださった訓練と思って感謝しております。

わがたましいよ。主をほめたたえよ。主の良くしてくださったことを何一つ忘れるな。主は、あなたのすべての咎を赦し、あなたのすべての病をいやし、あなたのいのちを穴から贖い、あなたに、恵みとあわれみとの冠をかぶらせ、あなたの一生を良いもので満たされる。（詩篇　103・2～5）

小橋とも
一九四五年生まれ
成蹊高校卒、学習院大学英文科卒業

キリストの力は弱さのうちに

米倉　真樹



左から妻の恵子さん、三男の泉くん、長男の翼さん、真樹さん

私は一九六二年、映画俳優だった父と母の長男として東京で生まれました。父は、朗らかで、人からも好かれ、友人も多い、遊びが好きな明るい人で、観劇や食事、旅行にもよく出かけました。しかし、酒を飲むと酒乱と化し、母をののしり、暴力に発展するありさまでした。母は、そんな父に理路整然と反論するため、争いはますます激しさを加えました。私はそんな両親の間に入って泣き叫んで、止めて！と懇願する、そんな日常でした。

私は、普段は明るく振る舞い、活発に友達と遊んではいましたが、どこか、心の片隅に淋しさを抱えていた気がします。中学時代、両親の争いは激化し、父の暴力から逃れるために母が何日も家を出てしまうこともありました。やがて協議離婚が成立し、私の高校進学を待って正式離婚となり、その時から私は母の姓「米倉」になりました。私は、現実逃避願望が強く、空虚感と孤独感を埋めるために何か打ち込めることはないかと思い、十七歳の時に俳優養成所に入る決心をしました。いま思えば、父の不安定な経済状態を間近に見てよ

く知っていたはずですのに、母を喜ばせ、早く楽をさせてあげたい、という思いもあって演劇の道の一歩を踏み出しました。通っていた高校を中退して都立高校の定時制に編入し、昼は俳優学校、夜は高校、合間を縫ってアルバイト、という生活で四年をかけて高校を卒業し、大学に入りました。

大学には入ったものの、授業もそこそこに、当時全盛だった小劇場の公演に夢中になっていました。大学は一年余りで中退し、アルバイトをしながら人脈を頼って営業に歩き、映画やテレビの仕事をさせてもらっていました。この頃から、自分が置かれている立場に少しずつ不安を覚えるようになり、きちんと基礎から演劇を学び直したいと思い、劇団の研究所に入所して舞台劇の勉強を始めました。それから六年ほど後に研究生として入って来たのが、妻の恵子姉妹です。その頃、私はすでに劇団から離れ、主に映像の仕事をしていましたが、所用で劇団を訪れた際、高校を出て秋田の農村から上京して来たばかりの少女が目に留まりました。都会ずれしない純粋さと素直な感じが、ガサガサと乾いた私の心に潤いを与えてくれるような気がしました。その年、一九九〇年九月、結婚と同時に私の母との同居生活が始まりました。

翌年春、母の乳癌が発見され、年内生きられるかどうかという診断でした。母と同じ病室におられた山部恵美子姉妹から「光よあれ」の第四集をいただきました。しかしその時は、ざっと目を通して、「ああ。こういう世界もあるんだなあ。死に対して、こんな考え方ができればさぞかし楽だろうな」と思った程度で、宗教的なものに対する警戒心の方が先に立って、それっきりとなりました。退院後、苦労と心配ばかりかけて母の寿命を縮めたのは私だ、という罪悪感と贖罪の気持ちから、伊豆や箱根や信州の温泉へと旅行をくり返しました。年を越し、いつ死んでもおかしくないという時期に、三週間長崎へ行く映画の仕事が入ってきました。親の死に目には会えない職業だと、覚悟はしているつもりでしたが、もし留守の間に母が死亡すれば、年若い妻に一切をまかせることになります。大変苦悩し、悩みました。その時に、フッと思い出したのがキリスト集会でした。何故か、そこへ行けば決断の糸口につながるアドバイスが得られるのではないかと思い、集会所へ出かけました。その日は火曜日で、ちょうど学び会が終わり、四、

五人の姉妹が立っておられました。私が抱えている問題を話したところ、ベックさんのお宅へ連れて行ってくださいました。その時何をお聞きしたのか思い出せませんが、神様に委ねるという思いが与えられ、とても気が楽になりました。長崎での三週間は無事に過ぎ、その三ヶ月後に母は亡くなりました。いただいていた賛美のテープやクラシック音楽を流して、献花方式の音楽葬のような葬儀を行ないました。

その年の夏の終わりに妻の妊娠がわかりました。それを告げられたとき、父親になる、という事実にとても不思議な感覚を覚えました。何だかピンとこないけれど、ただただうれしくて、自然に顔がほころんでしまうような感じがしました。「さあ、これから心機一転、妻子のため、家庭の幸福のためにガンガン頑張るぞ！上昇思考に燃えて、どんな仕事でも一生懸命やらねば！」。しかし、それとは裏腹に、燃えるような上昇意欲は満たされることなく、不平や不満もまた募っていく日々でした。妻のお腹が大きくなるにつれ、不安や焦りも大きくなり、過剰気味だった自信も徐々に薄れていき、出産の二ヶ月前に入っていた仕事に行くこともできないくらいになってしまいました。夜はベッドの中で一晩中うなされ、日中は、まるでどこかから不安感が注ぎ込まれて来るようで、毎晩お酒で不安をまぎらわす、そんな毎日でした。そんなある明け方、キリスト集会のことが頭に浮かび、わらにもすがる思いで早速ベックさんに電話をかけました。その日の家庭集会に誘っていただき、初めて集会に参加しました。その時に味わった明るさ、清々しさは、それまで私が経験したことのない、何とも言えない安堵(ど)感に包まれたものでした。その日に次のみことばを教えていただきました。

あなたの道を主にゆだねよ。主に信頼せよ。主が成し遂げてくださる。（詩篇　37・5）

この戦いではあなたがたが戦うのではない。しっかり立って動かずにいよ。（2歴代誌　20・17）

これらのみことばを通して、「この世界には私を造った偉大な方がおられて、その方は私のすべてを知り、責任を持って私を導いておられる。しかもその方は、私を愛してくださっている。そしてこれからのこともすべてその方に委ねて良いのだ」と知らされました。祈りの姿勢をとり、創造主なるお方に向かって、「いままでは知らなくてごめんなさい。これからのすべてをよろしくお願いします」と祈ると、肩の重荷が取り去られ、頭の中に立ち込めた霧のようなものが晴れて来るようでした。その後、しばらくは喜んで、家庭集会や喜びの集いに参加していました。仕事のほうも、面白いくらいに、コマーシャルの仕事が何本も決まったりして、経済的には厳しいものがありましたが、希望を持って、子育てを楽しんでいました。

その後二年くらいして、それまで受けたことのなかった健康診断を受けたところ、尿から大量の糖が出ていることがわかり、糖尿病と診断されました。後から考えると、それ以前から自覚症状があったのです。

徐々に筋力の低下を覚えるようになり、加えて足の裏の痛みを感じるようになっていきました。壊死などの合併症を恐れたのですが、そうではないようで、膠原病科や神経内科、整形外科などの受診を勧められて色々な検査の結果、糖尿病性の筋萎縮症、同じく抹消神経、血管障害と診断されました。「体が資本」とトレーニングで鍛え、肉体派を自負し、健康でありさえすれば何をしてでも食っていけると高をくくり、上昇思考で鼓舞して頑張っていた健康な頃の自分と、歩くこともままならない状態を比較して、神様に向かってつぶやくことが多くなりました。集会には、もっともっと厳しく辛い試練にもかかわらず、すべてを主の御手から受け取り、喜んで、輝いている方がたくさんおられるのに、神様に文句ばかり言っている自分に辟易（へきえき）しました。

肉の目で現実を眺めますと、健康と経済的な問題は大きな苦しみとなります。しかし静まって我が身を振り返りますと、そこにこそ、主の憐れみに満ちた深いご配慮と、守りがあることに思い至ります。私のような者が、もし、健康に恵まれ、経済的にも充足していたなら、罪の世界におびき寄せられて何をしていたことでしょう。主は、私のすべてを知っておられ、私が再び迷い出てしまわないように、一つのとげを与え、いつも主に頼らざるをえないような状況に置いていてくださっているのではないか、と思えるのです。

また、その啓示があまりにもすばらしいからです。そのために私は、高ぶることのないようにと、肉体に一つのとげを与えられました。それは私が高ぶることのないように、私を打つための、サタンの使いです。このことについては、これを私から去らせてくださるようにと、三度も主に願いました。しかし、主は、「わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現われるからである。」と言われたのです。ですから、私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで私の弱さを誇りましょう。ですから、私は、キリストのために、弱さ、侮辱、苦痛、迫害、困難に甘んじています。なぜなら、私が弱いときにこそ、私は強いからです。

（2コリント　12・7〜10）

また、イエス様への揺るぐことのない信頼を持つ妻が与えられ、毎朝みことばを読み、共に祈る時間がそなえられていることにも、主の深いご配慮を覚えます。子どもたちの成長を通しても、様々な場面で主の導きの確かさを知ることができます。三人三様、それぞれに賜物が与えられ、進路が導かれています。子どもたちに対しても、この世の気遣いからつい支配的になってしまうことも多いのですが、一人ひとりが主のものですから、それぞれが直接、主に導かれ、主の御手の中で、すべてを委ねて、祈り求めていってほしいと願っています。

いつでもイエスの死をこの身に帯びていますが、それは、イエスのいのちが私たちの身において明らかに示されるためです。私たち生きている者は、イエスのために絶えず死に渡されていますが、それは、イエスのいのちが私たちの死ぬべき肉体において明らかに示されるためなのです。

（2コリント　4・10〜11）

こんなボロボロの私でさえも、用いてくださって、ご自身のいのちを現わしてくださるという望みをいただき、これからも、すべてを備えて導いてくださるという約束が与えられていることは感謝です。イエス様の十字架の死が、私の背信の罪を赦し、みことばが生きて働く世界に迎え入れてくださるためであったことを思う時、主の深いご愛に感謝せずにいられません。

ついに、私たちがみな、信仰の一致と神の御子に関する知識の一致とに達し、完全におとなになって、キリストの満ち満ちた身たけにまで達するためです。それは、私たちがもはや、子どもではなくて、人の悪巧みや、人を欺く悪賢い策略により、教えの風に吹き回されたり、波にもてあそばれたりすることがなく、むしろ、愛をもって真理を語り、あらゆる点において成長し、かしらなるキリストに達することができるためなのです。そこで私は、主にあって言明し、おごそかに勧めます。もはや、異邦人がむなしい心で歩んでいるように歩んではなりません。

（エペソ　4・13～15、17）

私たちが滅びうせなかったのは、主の恵みによる。主のあわれみは尽きないからだ。それは朝ごとに新しい。「あなたの真実は力強い。主こそ、私の受ける分です。」と私のたましいは言う。それゆえ、私は主を待ち望む。

（哀歌　3・22～24）

米倉真樹
一九六二年、東京都生まれ
田無三中、都立武蔵高校定時制、東洋大学文学部中退、
俳協俳優養成所九期、劇団東京芸術座
妻・恵子　長男・翼　次男・豊　三男・泉

信じて待ちます

米倉　恵子



左が恵子さん、次男豊さん、叔母弘子さん、長男翼さん、義父有圭さん、中央三男の泉くん

わたしは光を造り出し、やみを創造し、平和をつくり、わざわいを創造する。わたしは主、これらすべてを造る者。

（イザヤ　45・7）

私は秋田県大館市に三人姉妹の長女として生まれ育ちました。活発で気の強い子どもでした。自己中心でわがままでしたので、友だちともよくケンカをしたり、意地悪をしたりしていました。また、本が好きだったこともあり、平凡な日常からの逃避願望や、少女特有の悲劇のヒロインへの憧れも強く、孤独感や虚しさに苦しくなったり、自己嫌悪に陥ったり、何のために生きているのだろう、と考えたりもしていました。死に対する不安や恐怖もずっとありました。

高校を卒業後、上京し、劇団の養成所に入りました。そこで主人と出会い結婚しました。私は、空想癖はありましたが楽観的で、思い煩わない性格なので、主人とは正反対でした。結婚後、主人が精神的に不安定になり、ノイローゼのようになりました。いろいろと思い詰め、悩み苦しんでいることは知っ

ていましたが、私にはどうすることもできず、黙って様子を見ているしかありませんでした。そのような時にキリスト集会に導かれました。

初めに、神が天と地を創造した。（創世記　1・1）

初めて聖書を開き、このみことばを読んだ時、「そうなんだ。すべては神様が造られたものだったんだ」と、すぐその存在を信じることができました。イエス様の十字架によって、罪深くわがままな私もきよめられ、赦されているのだと知った時、とても嬉しくホッとしました。天国の希望も与えられ、死の不安からも解放されました。

その後、主人と生まれたばかりの長男翼と三人で、毎週どこかで開かれている家庭集会や喜びの集いなどに参加させていただくようになりましたが、私は兄弟姉妹とのお交わりがとても苦手でした。もともと人見知りでもあり、初対面の方と何を話したらよいのかわかりませんでした。

集会に集っているみなさんが心から喜んで主を賛美し、証しをしているのを羨ましく見ていました。私も喜びが欲しい、と祈った時、主は答えをくださいました。それは、私の中の高ぶり、傲（ごう）慢、自尊心、無関心、これらが主にある兄弟姉妹との一致を邪魔しているのだということでした。

このことを悔い改め、肉の思いや計画をすべて主に委ねた時、お交わりする方がいつも主によって備えられるようになりました。また、近隣の愛する姉妹方との祈り会にも毎週加えさせていただいていることも本当に恵みです。祈り会を通して、主がまことに生きておられ、すべての背後に主の力が働いていることをいつも見せていただいています。私の中には良いものは一つもありませんが、主は、こんな私をも愛してくださり、優しく見守ってくださるので感謝です。この主の愛の中にとどまっていなければ、自分の罪の重さに押し潰され、落ち込みと暗闇が始まります。

仕事で失敗した時、逆に人よりうまくできると思った時、忙しくて静まって祈ることができなかった時、サタンはふとした瞬間のほんの小さな隙間に入り込んできて、平安をなくさせ喜べないようにしてきます。いつも主を見上げ、主から目を

離さずに歩んで行けるよう祈る日々です。

肉の思いは死であり、御霊による思いは、いのちと平安です。（ローマ　8・6）

あなたの恵みによって私の声を聞いてください。主よ。あなたの決めておられるように、私を生かしてください。（詩篇　119・149）

聖書のみことばは、私の喜びであり、元気の源です。イエス様大好きです。私の名を呼んでくださり感謝です。

まことに、みことばは、あなたのごく身近にあり、あなたの口にあり、あなたの心にあって、あなたはこれを行なうことができる。（申命記　30・14）

私は、どんな境遇にあっても満ち足りることを学びました。私は、貧しさの中にいる道も知っており、豊かさの中にいる道も知っています。また、飽くことにも飢えることにも、富むことにも乏しいことにも、あらゆる境遇に対処する秘訣を心得ています。私は、私を強くしてくださる方によって、どんなことでもできるのです。（ピリピ　4・11～13）

米倉恵子
一九七二年　秋田県生まれ
大館市立成章中学校、大館桂高校、東京芸術座養成所卒
夫・真樹　長男・翼　次男・豊　三男・泉

私の心は主に拠り頼み、私は助けられた

安田　友子



左が友子さん、高知集会のみなさんと

大阪で暮らしていた家族は、空襲で焼夷弾（しょういだん）が雨のように落ちてくるなかを逃げて、一九四五年に高知の西にある父の田舎に引き上げてきました。私はその翌年の一九四六年に生まれました。本当に貧乏でした。小学生の高学年のころから、学校から帰ると畑仕事、暗くなると夕食の支度のすべてをこなしていました。家で勉強などはできませんでした。母は私たちのために身を粉にして働いてくれていました。

私は中学校を出ると、すぐに県外に働きに出ました。懸命に働き、年月が過ぎていくなかで、ふと母のことを思い出すとき、働いている姿しか浮かびませんでした。そして私も母と同じように、働くことしかしていないのです。私には学歴も教養もなく、遊ぶことも、なにかに夢中になることもない…なんてつまらない退屈な人間なのだろうと思うようになり、劣等感で心が押しつぶされそうになっていきました。私は自分がいやでどうすることもできませんでした。どんな環境のなかにあっても勉強やいろいろなことをやっておけばよかった…すべては努力を怠った自分の責任だと思うしかありませんでした。

胎内にいる時からになわれており、生まれる前から運ばれた者よ。あなたがたが年をとっても、わたしは同じようにする。あなたがたがしらがになっても、わたしは背負う。わたしはそうしてきたのだ。なお、わたしは運ぼう。わたしは背負って、救い出そう。（イザヤ　46・3〜4）

当時の私は、神様の存在すら知りませんでした。全能の神様は、私が生まれる前から私を知っていてくださり、憐れんでくださり、どのような状況のなかにあっても守り、愛し、心配して見守ってくださっていたことが、何十年も後になって気づかせていただきました。言葉では言い表せないほどの感謝です。一九七一年、知人から「高知市内に店を出すので帰って手伝ってほしい」と誘われました。私は大阪で働いていたのですが、高知に帰ってみると、出店場所は市内から車で一時間も離れた安芸市でした。それでも安芸で、この方たちと一緒に店の仕事を始めましたが、三年半ほどして「このお店の権利を買って出店しないか」と話がありました。店の権利は決して安い物ではありません。とても迷いました、私はまだイエス様を知りませんでした、イエス様に祈ることも、相談することも知らず、自分で決めて、一九七五年五月に安田修さんと結婚、九月に店を始めました。

わたしはあなたがたのために立てている計画をよく知っているからだ。――主の御告げ。――それはわざわいではなくて、平安を与える計画であり、あなたがたに将来と希望を与えるためのものだ。（エレミヤ　29・11）

結婚十五年も過ぎたころから主人とは、店や子どもたちの教育のこと、すべてにおいてますます意見が合わなくなり、距離が開くばかりでした。どこまでいっても、平行線でした。家族も店も顧みない主人に私の心の糸はプツンと切れてしまいました。一九九六年、私から別れることを告げ、子どもた

ちを連れて家を出ました。このとき私は離婚が罪だとは知りませんでした。自分がどれだけ罪人であるかもわからない者でした。

主人と離婚をして三ヶ月ほどたったころです。古くからの知人の竹内さんから電話がかかってきました。彼女とは十八年前に安芸で出会い、一年ほどお付き合いをいただいた方です。その後彼女はご主人の異動で県外に出られ、そこで信仰を持たれたという話しは聞いていましたが、それ以来お会いしていませんでした。その竹内さんから突然電話がかかってきて、「会いたい」と言われたのです。私は彼女が信仰を持たれたことを聞いていましたので、「彼女に会ったらイエス様の話になる‥」と思いましたが、お気持ちが嬉しく、会う約束をしました。ただ、「イエス様のことを勧められても、それはそれでいいか」と思う気持ちが少しありました。実際に竹内さんとお会いしたとき、話しているあいだに涙が止めどなく溢れてくるのが私には不思議でした。

あなたの重荷を主にゆだねよ。主は、あなたのことを心配してくださる。

（詩篇　55・22）

すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。

（マタイ　11・28）

このとき竹内さんに会ったことは主の導きでした。イエス様のご計画はすごいです。主の御手が私に働かれたことが後になってわかりました。私は年が明けるとすぐに、イエス様を受け入れました。五十歳になっていました。イエス様を受け入れるといってもなにをどうしてよいのか、さっぱりわかりません。「イエス様、なにもわかりません、教えてください」と祈りました。

このみことばが目に留まりました。

主ご自身があなたの先に進まれる。主があなたとともにおられる。主はあなたを見放さず、あなたを見捨てない。恐れてはならない。おののいてはならない。

（申命記　31・8）

イエス様と私はいつも一緒なのです。見放さず、見捨てないと言ってくださいます。こんなお方はどこにもおられません。私は勇気と希望をいただき、頑張ることができました。娘の綾子の高校卒業までの三年足らずの月日は、いろいろなことがありましたが、イエス様が私の先を歩いてくださり、すごく守られていたと実感しております。

一九九八年、高知市内に移りました。イエス様はどんな祝福を与えてくださるのだろうか?と、喜んで期待していました。竹内さんに教会を紹介していただき、生まれて初めて教会に行きました。次のみことばを信じて洗礼の恵みをいただきました。洗礼のときは、大粒の涙が床の上に流れ落ちました。

主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。

（使徒　16・31）

主を恐れる者を祝福してくださる。小さな者も、大いなる者も。あなたがたが主によって祝福されるように。主は、天と地を造られた方である。

（詩篇　115・13〜15）

この頃はイエス様からの祝福しか考えていませんでした。イエス様の十字架も、罪も、永遠のいのちのことも、悔い改めることも、なにもわからないで、ただ自分の子どもたちを祝福していただきたいと願う思いで洗礼を受けました。イエス様を信じたらすぐに家族が救われて、また、祝福されるものだと思っていました。

彼（イエス様）への懲らしめが私たちに平安をもたらし、彼の打ち傷によって、私たちはいやされた。

（イザヤ　53・5）

もし、私たちが自分の罪を言い表わすなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。

（1ヨハネ　1・9）

この後、私は息子の裕哉を通して試練が与えられました。私の生涯でも一番辛い出来事でした。神様は、私の不信仰を知って「それでもわたしを愛するか」と試練を与えてくださり、そしてその試練を通して躓き（つまずき）からも完全に救ってくださいました。このことは後になってわかりました。

あなたは、私のいのちを死から、まことに私の足を、つまずきから、救い出してくださいました。それは、私が、いのちの光のうちに、神の御前を歩むためでした。

（詩篇　56・13）

私は教会にいつも行きたかったのですが、昼も夜も仕事で、日曜礼拝にはあまり行けませんでした。また、聖書の話もあまりよくわからず、喜びもなく、楽しくもなく、苦しくなるばかりでした。そのころ教会は新しい会堂ができ、たくさんの兄弟姉妹たちがお祝いにこられ、竹内さんも招かれていました。彼女とは何年も会っていなかったので、久しぶりの再会がとても嬉しかったです。式が終わり、お茶やお菓子を用意している間に、突然ひどい頭痛に襲われました。早めに帰らせていただき、その帰りに竹内さんに喜びがないことを告げました。また、竹内さんが集会に集うようになっておられることを知りました。

二〇〇四年に、竹内さんから「喜びの集い」が高知県であると誘っていただき、二つ返事で「行きます」と答えました。私は本当に主を求め、飢え渇いていましたから、喜びの集いでベックさんにお会いできることを楽しみにしていました。二時に仕事を終わらせて、高知市内から車で五十分ほどの所にあるロイヤルホテルに行き、四時に来られるベックさんを待ちました。しかし、四時になってもベックさんは来られません。私は六時から夜の仕事があり、五時半には店に入らなくてはなりません。このため四時半にタクシーを頼んでいました。四時半過ぎてベックさんは来られました。お部屋に入り、私は心にかかっていたことを話しました。ベックさんは、答えてくださり祈ってくださいました。十五分もないようなお交わりでしたが、平安で、とても嬉しかったです。仕事にも間に合いました。イエス様は、私の悩みに答えてくださいました。

だれでも渇いているなら、わたしのもとに来て飲みなさい。

（ヨハネ　7・37）

私はこのときイエス様と個人的にお会いできたと確信しております。神様と共に歩む人生へと招き入れてくださったその恵みに、心から感謝でいっぱいです。

わたしは、よみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも生きるのです。また、生きていてわたしを信じる者は、決して死ぬことがありません。このことを信じますか。

（ヨハネ　11・25〜26）

私はこのみことばに「はい」と答えました。イエス様はこんな「ごみ」のような者、罪や失敗ばかり繰り返す者、不信仰で怠け者で、なまぬるくて吐き捨てられてもおかしくないような私を拾ってくださいました。神様はイエス様を死者のなかから蘇らせなさった、その偉大な御力（みちから）をもって、私たちにも生きる力を与えてくださいます。私は心も軽く、喜んで教会から高知集会に移ってくることができました。

いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべての事について、感謝しなさい。これが、キリスト・イエスにあって神があなたがたに望んでおられることです。（1テサロニケ　5・16〜18）

このみことばのように日々を過ごしていましたが、一年半ほど経ったころから、さまざまなことが私を苦しめ始めました。躓き、私の醜（みにく）い罪、サタンの誘惑、人を裁く心、コンプレックス…このような状態が一年ほど続きました。祈っても、祈っても、答えは見つかりません。集会にはもう行けないと思うほどになっていました。ある夜、私は主に叫びました。主に、泣きながらしがみつきました。「イエス様、あなたがこの集会に私を導かれたのです。ここから私を出すようなことを、あなたはなさらないですよね」と祈り、みことばを与えてほしくて、聖書をめくってみことばを探し求めました。

主はわたしに言われた。「あなたは、わたしの子。きょう、わたしがあなたを生んだ。わたしに求めよ。わたしは国々をあなたへのゆずりとして与え、地をその果て果てまで、あなたの所有として与える。」（詩篇　2・7～8）

神様が私を生んでくださったのだ。私は神様の子どもなのだ。人やその他のことは、どうでもいい、私は父なる主だけを見ていればいいと思えるようになり、心が元気になってきました。そして8節の「国々をあなたへのゆずりとして与え」るとは、いま集っているキリスト集会のことだとわかりました。それからは、問題があっても、それは私を砕くために主がなさっているのだと、思えるようになりました。私の奥深くまで染み着いている劣等感や罪を、主は光に照らしてくださり、日々神様と共に歩み、主に頼ること、結果をすべて主に委ねることも教えてくださいました。主は、こう約束してくださっています。

ですから、すべての汚れやあふれる悪を捨て去り、心に植えつけられたみことばを、すなおに受け入れなさい。みことばは、あなたがたのたましいを救うことができます。（ヤコブ　1・21）

二〇〇七年、高知の兄姉たち六人で御代田の喜びの集いに参加しました。御代田ではたくさんの兄姉たちとのお交わり、メッセージ、お証し、恵みがいっぱいでした。愛するイエス様は、神の国の楽しみをふんだんに味わわせてくださいました。しかし、そのときもなお、私の心のなかには自分では手放せない趣味についての悩みがありました。でも、御代田から帰った翌朝、その思いわずらいは取り除かれておりました。私の心をあんなに大きく陣取っていた物がしぼんでいました。このとき、主のなさることは測り知れない、主はどんなことでもおできになるお方だと思いました。

二〇〇九年、大阪に行っていた息子の裕哉がなんの前触れもなく突然帰ってきました。十年大阪で暮らしているうちに、ストレスがたまり、お相撲さんのように太った息子、迷惑ばかりかける息子になっていました。自分一人で生きていくことぐらいできないのかと思い、辛く悲しくなりました。そうかともイエス様が裕哉をお守りくだっていたこと、主の守りがあったことをどれだけ感謝しても足りません。

未解決の問題が残っています。それは子どもたちの救いです。でも家族の救いは約束されています。いまはなにも見えなくても、聞こえなくても、感じなくても、わからなくても、暗闇でも、主イエス様を信頼して、主イエス様のお約束を信じて感謝の祈りを捧げたいです。

感謝のいけにえをささげる人は、わたしをあがめよう。その道を正しくする人に、わたしは神の救いを見せよう。（詩篇　50・23）

その後、私は自分が握っているものを示されました。それはなんと、仕事とお金です。お金とは、私が働いて得たお金のことです。私は仕事のこともお金のことも全部自分が握っていて、明け渡していませんでした。自分でなにもかも計画を立てていました。私は自分を信じ、自分の働いたお金を信じてきいって、一週間か十日くらいだから家に置いて、と言って帰ってきた息子を追い出すこともできません。体が大きいため、部屋がいっぱいに感じ、「そこにいると邪魔、邪魔、どいてどいて」と、口で息子を責めていました。息子は小さくなっていました。私は自分に愛がないことに気付いてはいるのですが、また、いやなことを言ってしまったのです。裕哉のことはずっと祈ってきました。娘も息子も自分よりも大切な存在なのですが、抱きしめてあげる愛がないのです。私は母親失格です。その夜、私は主イエス様に祈りました。「イエス様。裕哉が帰ってきました。私は一度もあなた様に裕哉が帰るようにと祈ったことはありません。それなのに裕哉は帰ってきました。私は裕哉を愛せません。私はわかりません。どうすればよいのでしょうか」と祈りました。次の朝、私は変えられていました。大きな息子は小さく見え、息子のせいで窮屈に感じていた部屋がすき間だらけです。イエス様は本当に不思議なお方です。イエス様の御業（みわざ）の喜びは経験した者にしかわかりません。息子が帰ったのは、イエス様の御心だと思いました。大阪での十年間

ました。そんな私にイエス様は、私があなたのために計画を立てたいと言ってくださいます。主イエス様は私に、仕事を取るか、わたし（イエス様）を取るか、と問われました。自分の思いとサタンの巧妙な誘惑がありましたが、でも私はすぐに祈りました。「主よ、あなたに従います。仕事は辞めます。主イエス様、私は仕事を辞めたら食べて行けません。主イエス様、あなたが養ってください」と祈りました。肩の荷がすっと取れました。

自分の意思を神様に完全に無条件に委ねるとき、神様のご支配に対してひざまずくときに、神様は私たちに大きな御力を与えてくださることを、知ることができました。

あなたの神、主は、あなたの心と、あなたの子孫の心を包む皮を切り捨てて、あなたが心を尽くし、精神を尽くし、あなたの神、主を愛し、それであなたが生きるようにされる。あなたの神、主は、あなたを迫害したあなたの敵や、あなたの仇に、これらすべてののろいを下される。あなたは、再び、主の御声に聞き従い、私が、きょう、あなたに命じる主のすべての命令を、行なうようになる。

（申命記　30・6～8）

翌朝、聖書を拝読していましたらこのみことばが目に留まり、すうっと入ってきました。私は本当に嬉しくなりました。このみことばのように主がなしてくださいました。私は各地の喜びの集いに参加することが嬉しいです。喜びの集いは、イエス様の御霊が働いておられる所、祝福や恵みがいただける所、また自分を悔い改めに導いてくださる所だと思っています。懐かしい兄姉たちとお会いし、メッセージを聞き、お交わりをし、恵みをいただいて帰ります。昨年の大阪キャンプでは、離婚した主人のことも心から祈れるようにイエス様に変えていただきました。

主は私の力、私の盾。私の心は主に拠り頼み、私は助けられた。それゆえ私の心はこおどりして喜び、私は歌をもって、主に感謝しよう。

（詩篇　28・7）

私は罪ばかり犯す者ですが、イエス様に頼り切ってきました。不信仰で揺れ動くこんな者にも、主イエス様は憐れみをかけ続け、神に似た者にと忍耐してくださいました。いつも一緒にいてくださり、私の力、盾、砦（とりで）となって、いつも、いつも、助けてくださいました。私にとって主は砦です。すべては神の支配のなかにあります。必ず神様がご計画をもって導かれる。そのことを受け止めて従っていきます。仕事を辞めてからは、主イエス様は、御代田のロングキャンプをはじめ、全国各地のキャンプ、さらにはバンクーバーにも導いてくださいました。そればかりか必要な物もイエス様が与えてくださいました。ただ感謝でいっぱいです。

ハレルヤ。私のたましいよ。主をほめたたえよ。私は生きているかぎり、主をほめたたえよう。いのちのあるかぎり、私の神に、ほめ歌を歌おう。

（詩篇　146・1～2）

わがたましいよ。主をほめたたえよ。主の良くしてくださったことを何一つ忘れるな。

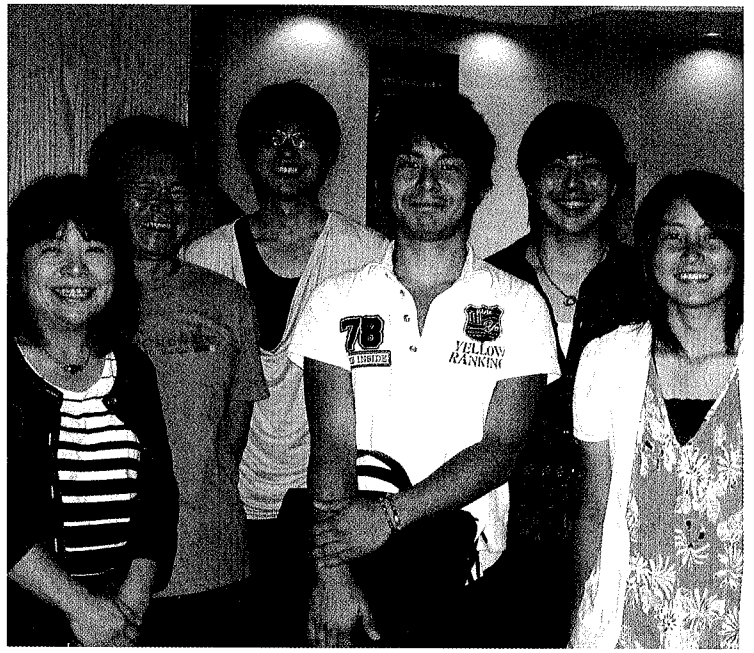
（詩篇　103・2）

安田友子
一九四六年、高知県幡多郡大月町橘浦生まれ。
橘浦小、中卒。
株式会社本店司でＯＢとして勤務。

12 人の証し Unser HERR lebt

イエス様以外に救いはありません

永川　誠



左から妻の智子さん、誠さん、三男の慎之介さん、二男の祥平さん、長男の大介さん、長女ののぞみさん

私は、一九五三年四月、四人兄弟の長男として、鹿児島県奄美群島の中の徳之島という小さな島に生まれました。小さい頃は、父が学校の教師ということもあって、周りから「先生の子は頭がいい」と言われ、ちやほやされて育ったように覚えています。実家は代々先祖崇拝でしたので、小さい頃から先祖の墓掃除や仏壇の前で手を合わせて先祖を神として拝んでいました。

子どもの頃、怖いものとして両親から教えられたのは、警察と神様（先祖）でした。何かにつけ「神様が見ているから、悪いことをしてもすぐにわかってしまうよ」とか、「悪いことをしたら警察に連れて行くぞ」と言われ、恐れを感じていました。

主（神）を恐れることは知識の初めである。

（箴言　1・7）

小学校二年生の時、急性盲腸炎になり、生死をさまよう体験をしました。お腹に痛みを感じ、病院へ行ったのですが、ただの腹痛と診断され、痛み止めをもらって帰りました。その日の夜中に痛みがさらに増して、のたうちまわるほどの激痛が襲い、気を失うほどでした。なんとか朝を迎え、急いで違う病院へ行きました。その病院で手術したときは、すでに腹膜炎を併発して手後れ状態で、医者から「この子はもうだめだ」と知らされたそうです。しかし、奇跡的になんとか一命を取り留めました。

あなたの目は胎児の私を見られ、あなたの書物にすべてが、書きしるされました。私のために作られた日々が、しかも、その一日もないうちに。

（詩篇　139・16）

高校を卒業して、東京のテレビ専門学校へ入学しました。学校は二年間だったのですが、途中から授業についていけなくなり、生活のためアルバイトに専念するようになりました。そんな中、ゴスペルソングに出会い、ギターを弾くことと、ゴスペルソングを歌うだけのために教会へ行くようになりました。

その教会は、異言や癒しや聖霊様を強調する、カリスマ的な教会でした。聖霊様を受けないと救われない、聖霊様を受けると異言が言えるようになり病気を癒すことができる、などと言われ、憧れました。礼拝の中でも、異言で祈っている人が大勢いましたが、私は祈れませんでした。牧師の説教も、大声で熱狂的でしたが、私はイエス様のことや、十字架の意味がまったく理解できませんでした。しかし、教会生活の中で、祈ったことが聞かれるという、体験をしました。当時私は、聖霊様を受けていない者が祈っても、祈りは聞かれないと勝手に思い込んでいましたので、祈りがかなえられたときは、衝撃的でした。

何事でも神のみこころにかなう願いをするなら、神はその願いを聞いてくださるということ、これこそ神に対する私たちの確信です。私たちの願う事を神が聞いてくださると知れば、神に願ったその事は、すでにかなえられたと知るのです。

（1ヨハネ　5・14〜15）

その一つは、一九七六年、二十三歳になった頃のことです。アル

バイト生活を続けていましたが、長男だという意識に目覚め、そろそろしっかりとした仕事につかなければと思うようになりました。そんなある日、駅の構内に貼ってある郵便局員募集のポスターに目がとまり、郵便局だったら両親が住んでいる徳之島へも転勤ができるのでは、と思い応募しました。その当時は不況で、いろいろな人が試験を受けに来ていました。試験が終わったあとで、倍率が十二～十三倍だったと聞かされ、これは絶対無理だとあきらめました。

教会のゴスペルソング同好会の皆さんにその話をしたら、みんなで祈ろうと言われ、心を合わせて祈っていただきました。自分の祈りは聞かれるはずがない、と勝手に思い込んでいた私も一緒に参加しました。二～三ヶ月たった頃、郵便局から手紙が来ました。どうせ不採用通知だろうと思いながら手紙をあけたらなんと、「合格」の通知でした。思わず「イエス様！」と天を仰ぎ見て、祈りを叶えてくださったことに感謝いたしました。そして、ゴスペルソング同好会の方々に、電話で合格を伝えると、みんなでいつも祈っていたことを教えられ、自分の不信仰を悔い改めさせられました。このことがきっかけに、心からイエス様に信頼していこう、イエス様をもっと知りたいという思いで、聖書も読むようになりました。

求めなさい。そうすれば与えられます。捜しなさい。そうすれば見つかります。たたきなさい。そうすれば開かれます。だれであれ、求める者は受け、捜す者は見つけ出し、たたく者には開かれます。（マタイ　7・7～8）

教会生活が一～二年たった頃、自分も聖霊様を受けて救われ、異言で祈れるようになりたいと、求めるようになりました。そして、聖霊様を受けるために、三日間の断食修養会にも参加して求めたのですが、聖霊様を受けることはできませんでした。それからというもの、自分は救われないのではという思いになり、だんだん教会から足が遠のいていきました。気がつくといつの間にか、ほとんど教会にも行かなくなり、聖書も読まなくなり、祈ることもなくなり、この世にどっぷりと浸かっていました。

しかし、そのような中でも、心の奥底にイエス様がいらっしゃること、この方でないとだめだという思いがありました。

この方以外には、だれによっても救いはありません。世界中でこの御名のほかには、私たちが救われるべき名としては、どのような名も、人間に与えられていないからです。（使徒　4・12）

郵便局に就職が決まり、アパート近くにある江戸川郵便局の外務職員に配属されました。男性ばかりの職場ということもあり、和気あいあい独身の仲間たちと楽しい日々を送っていました。二十九歳の時、郵便局と外部の方たちとのクリスマス合コンで家内と知り合いました。私は三十歳までには結婚したいと思っていましたので、恥も外聞もなく、いきなり電話をして、付き合ってくれるようお願いしました。付き合ってしばらくしてから、当たって砕けろという思いで、自分が長男であること、徳之島出身で将来島に転勤になるかもしれないことなどをすべて打ち明けて、「結婚してください」とプロポーズしました。

一九八三年、三十歳の五月に結婚式を挙げるよう、二人で式場を決めたり招待状を出したりして準備をしました。ところが突然、結婚式直前の四月に私の徳之島転勤が決まり、離れ離れになってしまいました。五月に式を挙げ、結婚と同時に家内は、一度も行ったことのない徳之島へ行くことになり、おそらく不安がたくさんあったと思うのですが、そのようなことはいっさい顔に出しませんでした。言葉や習慣がまったくわからない島で、一～二年は慣れようと頑張ってくれていたのですが、次第にふさぎ込むようになっていきました。

すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。（マタイ　11・28）

その頃、郵便局には外務職から内務職へ変更できる転用試験制度があり、その試験に挑戦しました。三回目にようやく

合格して内務職になったのですが、島にはその空きがなく鹿児島へ行くことになり島を出ました。鹿児島へ行ったら、イエス様が働かれる教会を探そうと思い、家内とふたりで導いてくださるように祈りました。

あなたの神、主であるわたしが、あなたの右の手を堅く握り、「恐れるな。わたしがあなたを助ける。」と言っているのだから。（イザヤ　41・13）

鹿児島での生活が始まり、いろいろな教会を見てまわりましたが、どの教会も何か違う感じがして行きませんでした。しばらくしてから、私たちが住んでいる団地の部屋の隣に、新婚さんが引っ越してこられました。挨拶に来られたとき、玄関に飾ってあった教会式結婚式の写真を見て、「永川さんはクリスチャンですか?今度の日曜日にうちで集会があるのでいらっしゃいませんか?」と誘われ、集うことにしました。

集会には、あちらこちらから五～六人の方が来ていましたが、牧師らしき方がいなかったので、変な集会ではないのかなと疑いの思いが湧きあがって警戒しました。テープで、メッセージも聞いたのですが、まったくわかりませんでした。お茶の交わりの時、集まった方々がみなさん教会を出られた方たちで、一人の姉妹が本屋さんでリンデさんの本と出会って感銘を受け、ベック兄に電話をしてこの集会が始まったことなどを話してくださいました。帰りに、「光よあれ」の証しの本とベック兄のメッセージテープをくださったので、わからないまま持って帰りました。

部屋に帰り「光よあれ」を読み始めました。読み進んでいくうち心の内側が、何か燃えるような気持ちになって、何かが違うように感じ、いつの間にか引き込まれていました。ここにイエス様の働かれる本物の集会があると感じ、家内と相談してこの集会に集うことにしました。

そのうちに、ベック兄と吉祥寺の兄弟方が大勢で鹿児島に来られるようになり、鹿児島集会が始まりました。ベック兄が来られて我が家で家庭集会が持たれたとき、私は聖霊様を受けていないのでまだ救われていないことをベック兄に話したら、ベック兄は「イエス様を信じて受け入れたその時からみんな救われているよ」と言って、イエス様の十字架の意味や復活、再臨のことをはっきりと教えてくださったので、嬉しくなって安心したことを覚えています。

またあなたがたも、キリストにあって、真理のことば、すなわちあなたがたの救いの福音を聞き、またそれを信じたことによって、約束の聖霊をもって証印を押されました。（エペソ　1・13）

二〇〇七年十月の郵政民営化で、私は今の職場へと配置替えになりました。始めの頃は、新しい環境に慣れようと自分なりにいっしょうけんめい努力しましたが、一年を過ぎた頃、突然体に震えが来て会社に行けなくなり、精神科の病院に行きました。病院の先生から「適応障害」と診断され、うつ病の一歩手前だと知らされました。そして、二ヶ月休養するようにと診断書を書いてくださり、精神安定剤のような薬を何種類か処方してくださいました。処方された薬をしばらく飲んでいましたが、飲むと体がだるくなって、何もやる気がなくなってきて、頭がボーとするようになってきたので途中で飲むのを止めました。休んでいる間、毎日二～三時間、近くを散歩するように決めて、目的もなく歩いていました。ただひたすら歩いていましたが、いつの間にか、イエス様と対話するような感じで、祈りながら歩くようになっていきました。それは、この世のしがらみを忘れ、とても平安な時間でした。そして、薬なんかに頼らないで、イエス様に頼る方が、一番の薬だと気付かされました。精神的にも安定して、元気が出てきた夏の終わり頃、上司から「九月の人事異動で人がいなくなるので出てきてくれないか」と言われ、職場復帰しました。戻った職場は相変わらず過酷な環境でしたが、イエス様が私をこの職場に置かれているのには、何か意味があるのではないかと思い、イエス様に祈りつつ現在に至っています。

彼がわたしを愛しているから、わたしは彼を助け出そう。彼がわたしの名を知っているから、わたしは彼を高く上げよう。彼が、わたしを呼び求めれば、わたしは、彼に答えよ

う。わたしは苦しみのときに彼とともにいて、彼を救い彼に誉れを与えよう。（詩篇　91・14～15）

あるとき、家内から「一緒にメサイアを歌わない？」と誘われました。自分の声に自信がなく、音符もろくに読めないのに無理だといつも断っていました。二〇〇九年八月の御代田キャンプから帰ってきて、「さあ、明日から仕事を頑張ろう」と気持ちを切り替えて備えていたのですが、何故か庭の山椒の実が気になり、脚立を持ってきて登って摘み始めた途端、バランスを崩して地面に落ちて右足を骨折してしまいました。全治二ヶ月と診断を受け、自宅で治療することになりました。

何もすることなく一日を過ごすのはもったいないと思い、メサイアのテナーのCDを聞いて練習することにしました。九月の福岡メサイアキャンプにも参加して発声練習ができ、だんだんメサイアを歌うのに自信が湧いてきました。二〇〇九年のメサイア東京公演と二〇一〇年十二月のメサイア東京公演に参加することができました。イエス様は、ご自分がなさろうとすることは、どんなことをしてまでも、成し遂げられる方であることを、メサイアの賛美を通して教えられました。

詩と賛美と霊の歌とをもって、互いに語り、主に向かって、心から歌い、また賛美しなさい。（エペソ　5・19）

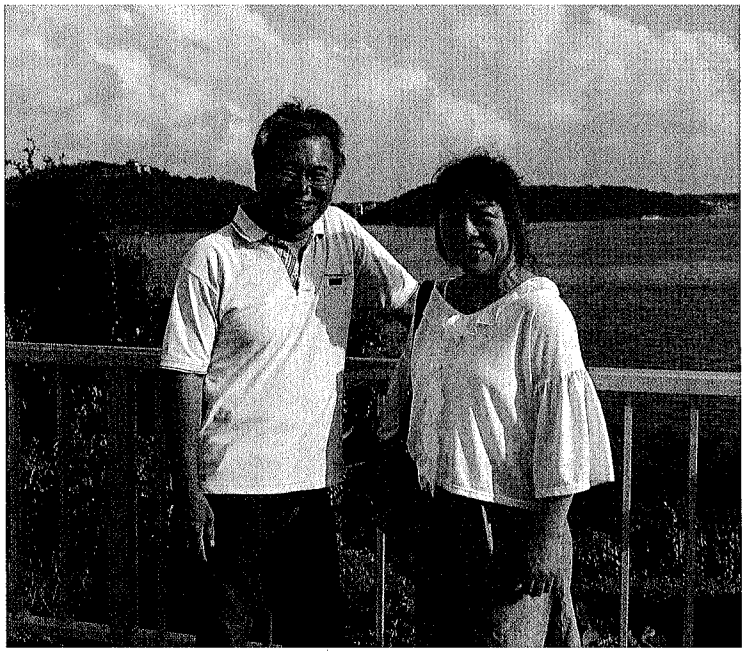
私は今年六十歳になりますので、来年の二〇一四年三月には定年退職となります。今までのことを振り返ってみると、すべてのことにおいて、イエス様が備えられ、益としてくださり、導いてくださったことを感じます。イエス様だけが、私のことをいつも見守っていてくださる方であると、確信しています。

彼（イエス様）に信頼する者は、失望させられることがない。（ローマ　10・11）

永川誠（えがわ　まこと）
鹿児島県大島郡徳之島町山出身
和泊小・中学校、県立大島高校卒業
日本郵便国分郵便局勤務

測り知れぬ主の恵

永川　智子



ご主人の誠さんと

わたしを呼べ。そうすれば、わたしは、あなたに答え、あなたの知らない、理解を越えた大いなる事を、あなたに告げよう。（エレミヤ　33・3）

私は、一九五八年四月、東京の下町である江戸川区に、三人兄弟の長女として生まれました。私が生まれたとき、母は破水をし、生まれてすぐの私は声も出ず、吸う力もなく、スプーンでミルクを飲ませなければいけないほど弱々しく、育てるのが大変だったと、母から聞かされました。小さい頃は、父が印刷会社、母は美容室と、二人とも働いていましたので、長女の私が、食事の準備や掃除、洗濯など家事全般をするようにしつけられました。中学、高校と私立の女子校に通い、楽しい青春時代を過ごしました。高校を卒業して、母と同じ美容師になりたいと思い、美容専門学校へ進学しました。美容学校も無事卒業し、美容師の免許も取り、母と一緒の美容室で働くことになりました。仕事は楽しく一生懸命頑張ってやっていたのですが、母と一緒に仕事をしていると、いろいろ意見や思いが

ぶつかることもあって、悩むようになっていきました。

あなたの若い日に、あなたの創造者を覚えよ。わざわいの日が来ないうちに、また「何の喜びもない。」と言う年月が近づく前に。（伝道者　12・1）

そのような日々の中で、私が二十二歳のとき、突然、父が経営していた印刷会社が多額の負債をかかえて倒産し、父と弟が家族にも告げず、姿を消してしまいました。何も聞かされていなかった母と私と妹の三人は、家にいられなくなり、慣れ親しんだ家を出て別の土地に行き、新しい生活を始めました。家族がみんなバラバラになり、途方に暮れ、いつも不安を感じていました。しかし、神様が必ずいる、という思いはいつも心の中にあり、その神様に願い事を叫んでいました。

主よ。私の祈りを耳に入れ、私の願いの声を心に留めてください。私は苦難の日にあなたを呼び求めます。あなたが答えてくださるからです。（詩篇　86・6～7）

新しい土地では普通の会社の事務職に就職しました。淡々とした毎日を過ごしていましたが、ある日、心に空しさを感じ、結婚したいという思いにかられ、神様に求めるようになりました。二十四歳のクリスマスに、神様は今の主人との出会いを備えてくださり、結婚へと導いてくださいました。結婚を決めた頃には、バラバラだった家族も一緒に暮らすようになっていました。

主人は、鹿児島県の徳之島の出身で、長男ということもあり、将来島に転勤したいと常日頃言っていましたが、まだまだ先のことだと思っていました。しかし、結婚と同時に徳之島転勤が決まり、一度も行ったことのない島へ突然行くことになりました。

あなたの道を主にゆだねよ。主に信頼せよ。主が成し遂げてくださる。（詩篇　37・5）

徳之島の海はとっても美しく、大自然の中での生活は大変恵まれていました。初めて東京以外の地へと足を踏み出したのですが、言葉も習慣も違い、まわりは海で、実家に帰るにも、こっちからあっちへという具合にはいかず、涙を流すこともありました。そのような中で、三人の男の子が与えられ、育児に奮闘する毎日でしたが、なぜか私の心は年々、島を出たいという思いにかられ、宇宙を造られた神様に祈るようになっていました。

あなたがたの思い煩いを、いっさい神にゆだねなさい。神があなたがたのことを心配してくださるからです。（1ペテロ　5・7）

神様は、再び私の祈りを聞いてくださり、小さな願いを叶えてくださいました。主人が内務職への変更試験に合格して、違う職場へ配置替えになることが決まったのです。原則として、配置換えは島の中ですることになっていたのですが、そのときには島に内務職の空きがなく、「残念だけど鹿児島でも良いか」と局長さんに言われたそうです。そのようなわけで、わたしたち家族五人は鹿児島へと導かれ、島を出ることになりました。主人は、「イエス様でないとだめなんだ」と、ときどき言っていましたので、鹿児島に行ったらイエス様をより良く知ることができる教会へ導いてくださるように二人で祈りました。

心を尽くして主に拠り頼め。自分の悟りにたよるな。あなたの行く所どこにおいても、主を認めよ。そうすれば、主はあなたの道をまっすぐにされる。（箴言　3・5～6）

鹿児島に来て、主人と教会を探して回りました。どこに行っても主人は「違う、ここも違う」と言って、続けて行こうとはしませんでした。あるとき、隣に引っ越してきた奥さんが挨拶に来られ、私たちがクリスチャンではないかと思われたのか、「今度うちで集会があるのですが、来ませんか」と誘ってくださったので、主人と集うことにしました。

私は教会に行ったことも聖書を読んだこともなく、まして

イエス様の十字架のこともわかりませんでしたので、緊張することもなく、淡々とその集まりに参加しました。しかし、集会には特に心打たれるものはありませんでした。それからしばらくして、集会に集ったときにいただいた「光よあれ」という本を読んだ主人が、「この集まりは本物かもしれない。ここに決めよう」とうれしそうに言ったので、わたしも、イエス様をより良く知りたいと思い、一緒に集うことにしました。

神は真実であり、その方のお召しによって、あなたがたは神の御子、私たちの主イエス・キリストとの交わりに入れられました。（1コリント　1・9）

そのうち、ベック兄や吉祥寺集会の兄弟方が鹿児島に来てくださるようになり、鹿児島集会が始まりました。最初の頃は、決められた集会所はなく、それぞれの家庭を持ち回りで集っていました。吉祥寺の兄弟が宮崎に来られると聞けば宮崎へ車を走らせ、熊本に来られると聞けば熊本へと、イエス様の祝福を求めて走って行きました。兄弟方のメッセージや皆さまとの交わりを通して、聖書のことやイエス様の十字架の意味などが、だんだんわかるようになり、主人がイエス様でなければダメだと言っていたこともわかるようになった頃、一九八八年に宮崎県のえびの高原で持たれたキャンプで受洗の恵みにあずかりました。

主ご自身がこう言われるのです。「わたしは決してあなたを離れず、また、あなたを捨てない。」（ヘブル　13・5）

イエス様から自分の傲慢さを示された、忘れられない出来事がありました。一九九二年、男の子ばかり三人の後に、待望の女の子、長女のぞみが与えられたときのことです。私は、祈りが聞かれる体験を何度もし、イエス様の存在を確信していたにもかかわらず、出産に関してはイエス様に祈らず、帝王切開だと楽に出産できると思い込み、心のどこかに神様が備えられた自然な出産を嫌がる自分がいました。イエス様は、そのような私の傲慢な思いを知って、あえて願いを叶えてくださいました。陣痛が始まり入院しましたが、弱い陣痛ばかりで強い陣痛がなく、このままでは胎児に負担が大きいと、急きょ帝王切開をすることになったのです。

脊髄から麻酔の注射を行い、しばらくして手術が始まったのですが、お腹にメスが入れられたとき激しい痛みを感じ、「痛い！」、と大声で叫んでいました。手術が無事終わり、麻酔から目が覚めたときも、頭が痛く自分で食事を取ることもできませんでした。単に帝王切開の方が楽だと思い込み、それを願ったのですが、自分の思いとは正反対に、激しい痛みと苦しみを伴うものでした。私はそれまで、イエス様の恵みを当たり前のように受け取っていましたが、イエス様は私の思いをすべて知っておられ、どんな小さなことにもみこころを表されることを知り、自分の傲慢さを心から悔い改め、イエス様を恐れました。

だれが自分の数々のあやまちを悟ることができましょう。どうか、隠れている私の罪をお赦しください。あなたのしもべを、傲慢の罪から守ってください。（詩篇　19・12〜13）

イエス様を知る者とされ二十年以上が経ちました。そのような中、四年前から賛美する喜びを与えられました。楽譜も読めず、声にも自信がありませんでしたが、ある姉妹から「賛美は祈ることと同じ意味があるよ」と教えられ、勇気を出して一歩を踏み出しました。主人にも賛美することのすばらしさを言って誘うのですが、いつも断られていました。イエス様に、主人も一緒に賛美に加えてくださるよう祈っていますと、イエス様は主人の右足を骨折させてまでも、賛美に加えてくださいました。今は、娘と三人で賛美する恵みをいただいています。

わがたましいよ。主をほめたたえよ。主の良くしてくださったことを何一つ忘れるな。（詩篇　103・2）

永川智子（えがわ　ともこ）
昭和女子学園中高課程卒業

12 人の証し　Unser HERR lebt

主イエス様が与えてくださった平和で穏やかな生活

藤田　瑛二



後列右から二人目が瑛二さん、日立集会のみなさんと

私は、一九四二年二月に青森県弘前市で生まれ、大学卒業まで弘前市で生活しました。当時、祖父母、父母、私の兄弟五人、伯母の合わせて十人の大家族で暮らしていたこともあって、大学を卒業したら家を出て、経済的にも自立し、独立したい、という気持でいっぱいでした。弘前大学では化学を専攻しましたので、幸い日立化成工業株式会社に入社することができ、茨城県の日立市に住むようになりました。

日立市には日立化成の主力工場の一つ、山崎工場（現在は山崎事業所）があります。私は、主としてこの工場の開発部で製品開発の仕事をして過ごしました。

工場に勤務していた時は、何事にも自分の力で物事を達成していくことに生きがいを感じておりました。また、辛いこと苦しいこともありましたが、自分が会社に必要な者である、と認めてもらいたいため、努力していました。結婚してからも、家族を養うため、少しでも豊かな生活をするためと思い、仕事以外のことはすべて家内に任せ、ただただ一生懸命仕事をしていました。

このような私にも、主イエス様は少しずつ「わたしの所へ来なさい。わたしが休ませてあげます」と導いてくださいました。主イエス様が私にしてくださった六つの導きについて、お話しさせていただきます。

●導き1　私の勤務していた工場では工場新聞を発行しておりましたが、ある年、従業員全員の「自分の座右の銘としている言葉」を掲載したことがありました。そこに、「患難が忍耐を生み出し、忍耐が品性を生み出し、品性が希望を生み出す」という言葉がありました。私はこの言葉に一目ぼれしてしまいました。製品開発に従事している者にとって、大切なこと、必要なことが的確に表現されていると思いました。この言葉を座右の銘にしている人がいるとは、この会社も捨てたものじゃないと思いました。

家へ帰ってから家内に、「うちの会社には、とても素晴らしい人がいる」と言ってその新聞を見せたところ、家内は驚いたふうもなく、「これは聖書にある言葉ですよ」と言って聖書を持ってきて、ローマ書5章3～5節を開いてくれました。そして、読ませられたのです。

そればかりではなく、患難さえも喜んでいます。それは、患難が忍耐を生み出し、忍耐が練られた品性を生み出し、練られた品性が希望を生み出すと知っているからです。この希望は失望に終わることがありません。なぜなら、私たちに与えられた聖霊によって、神の愛が私たちの心に注がれているからです。（ローマ　5・3～5）

これが、最初に出会った聖書のみことばです。聖書にはこんな素晴らしいことが書いてあることを、初めて知りました。いつか聖書全部を読んでみたいと興味を持ちました。

●導き2　私が五十歳になった時、米国での市場開拓の仕事が与えられました。三ヶ月に一度、約十日間米国へ出張することになったのです。この仕事をぜひ成功させたいという気負いと、会社の皆さんが期待しているような成果を挙げることができる

だろうか、という不安な思いを持って、ひとり米国に出かけたことを覚えております。

この時、家内に「飛行機の中で読む本はないか」と聞きましたら、「この本を読んだら」と言って、「死は終わりではない」という本を渡してくれたのです。この本は、お読みになった方も多いと思いますが、テレビのニュースキャスターをしていた山川千秋兄が、がんを患い、闘病生活をしていた時のことを書いています。約三百ページくらいだったと思いますが、電車に乗って読みだしたら涙が流れて止みませんでした。ただただ泣きながら読み続けました。日立から上野、東京まで一時間四十分、東京から成田エクスプレスで成田空港まで一時間、そして、飛行機の待合室でと一気に読んでしまいました。読み終わった時、なんとも言えない、すがすがしい爽(さわ)やかな気持になりました。涙で全身が洗われたようでした。出発前にあった気負いや不安は消え去って、平安な気持で出張を終えることができました。山川兄が、与えられた状況を素直に受け入れ、苦しい環境の中でも希望を持って生きたことに、私は感動しました。ベック兄が渡された「病者の祈り」という詩に山川兄はとても慰められ、何度も何度も読んでおられたようですが、この詩は私の心をも慰めてくれました。

山川兄が苦境の中で、生き生きと平安に生活できた力、また私の心をも慰め平安にさせてくれた力、この力はどこから来るのだろうと思いました。

●導き3　二人の子どもたちはキリスト教の幼稚園に通い、小学校に入ってからも日曜学校に通い続けました。家内はその頃からいろいろな教会に行って、一九八五年十一月に教会で受洗しました。そして、三年半後の一九八九年四月に中学生だった長女亮子が、そしてその翌年の一九九〇年五月に大学生だった長男匡が、それぞれ違う教会で受洗しました。しかし、私には関心はありませんでした。

その後、家内を含む数名の日立の姉妹たちは、「光よあれ」の本を通して吉祥寺集会を知り、導かれたようです。こうして、一九九一年から我が家で家庭集会が持たれることになりました。初めは月一回土曜日に行われました。私は、その日は出勤することとして集会を避けていました。しかし、出勤する必要のない日も出てきました。そんな時、私の家は平屋ですので、隠れることも逃げることもできません。だんだん集会の兄姉たちと顔を合わせることになり、そのうちに集会に出るようになりました。聖書のことはまったく知りませんでしたが、ベック兄や兄弟たちのメッセージがスムーズに耳に入ってきたのは不思議でした。皆さんのメッセージを聞いて、聖書を読まなければと思うようになり、また「死は終わりではない」の本を読んだ時に私の心を慰め、平安で満たしてくれた力は聖書の中に見出せるだろうとも思いました。

一九九二年の八月に西軽井沢国際福音センターでの「喜びの集い」に参加し、勧められるまま、受洗いたしました。

後に、キリスト集会は人間的な制度を排除し、ただ「御霊」によって導かれて歩もうとしているキリスト者の群れであることを知りました。感謝です。

●導き4　主イエス様は、私どもの家族にさらに驚くばかりの奇(くす)しい恵みを注いでくださいました。長女亮子、長男匡の結婚のことです。

二〇〇一年十月に、長女亮子が和田周作兄弟と、二〇〇三年五月に、長男匡が柿沼信子姉妹と結婚しました。主は、キリスト集会の中に親戚を与えてくださいました。

●導き5　二〇〇一年十二月に、青森で初めて礼拝が持たれることになりました。当日は例年にない大雪で、飛行機が無事に着陸できるかどうか心配されました。しかしその日、ベック兄姉たちの乗った飛行機だけが着陸できたのです。主のなさることはすごいです。

ベック兄姉は、弘前へ立ち寄って、入院している家内の母を見舞ってくださいました。病院では、私の母と家内の母、私の義理の姉がベック兄と一緒にお祈りすることができました。主のお導きに感謝の気持ちでいっぱいでした。

その後、青森で、毎月隔週の日曜日、礼拝・福音集会が行われるようになりました。私ども夫婦は三ヶ月に一度、この集会に参加させていただいております。青森集会に参加す

ることに、弘前市に住んでいる私の兄夫婦、私の弟夫婦、家内の弟夫婦との交わりを持っております。今、これらの親族の救いを祈っています。

主イエス様は私どもの思いをはるかに越えて、遠い北国の親族の救いをご計画しておられること、本当に感謝です。

●導き6　私は、六十歳で定年退職し、六十八歳でアルバイトもやめて仕事から解放され、家内と二人だけで過ごす時間が長くなりました。残された人生を平和で穏やかに過ごしたいと願っていましたが、現実はまったく違うものでした。何かをしようとするにつけ、私と家内とでは手順や方法がまったく異なります。自分の意見が通らず、否定されます。自分の意見を通そうとすると口争いとなり、不機嫌と不愉快な思いの日々でした。

このような生活がしばらく続きました。しかし、ある日から心に変化が起こりました。私どもはそれぞれ各自聖書を読む時間を毎日持っておりましたが、ある時から信仰の本を数ページずつ、一緒に、じっくり味わいながら読むようにしました。このことを続けて祈っているうちに、自分の行動、また自分の心の態度について悔い改めへと導かれるようになりました。

私は、他人の前で恥をかかないように、自分の弱さを見せないように、と気を遣って生活していました。しかし、家庭の中では、そのような気遣いや配慮はまったくありませんでした。気ままで、肉のままの、自我に支配された生活でした。私は、何事においても自分がどんなに正しいか、相手はどんなに間違っておかしいかと理屈を言い、自己の義に立ち、また自分の都合や思い通りにならないと怒り、いらだち、批判する者でした。主イエス様は、私と家内とのトラブルを通して、自分の本質がどのようなものであるかを光の中に出してくださり、明らかにしてくださいました。自我がすべての争いの原因であると教えてくださいました。

律法を定め、さばきを行なう方は、ただひとりであり、その方は救うことも滅ぼすこともできます。隣人をさばくあなたは、いったい何者ですか。

（ヤコブ　4・12）

主の御前では、一日は千年のようであり、千年は一日のようです。

（2ペテロ　3・8）

一切れのかわいたパンがあって、平和であるのは、ごちそうと争いに満ちた家にまさる。

（箴言　17・1）

主はあなたに告げられた。人よ。何が良いことなのか。主は何をあなたに求めておられるのか。それは、ただ公義を行ない、誠実を愛し、へりくだってあなたの神とともに歩むことではないか。

（ミカ　6・8）

藤田瑛二

一九四二年青森県弘前市生まれ

弘前高等学校、弘前大学文理学部化学　卒業

日立化成工業株式会社　退職

妻・恭子　長男・匡　長女・和田亮子

主であり師であるこのわたしが、あなたがたの足を洗ったのですから、あなたがたもまた互いに足を洗い合うべきです。

（ヨハネ　13・14）

「私は、自分の考えが正しいと主張して家内と論争し、家内を自分の思い通りに動かそうとしていらだっている者です」と正直に告白し、祈っているうちに、主イエス様は私の心を変えてくださいました。家内との争いに勝っても負けても、それはたいしたことではなく、どうでもよいことだと思えるようになりました。自分の考えや思いに固執しないで、隣人を受け入れ、互いに譲り合うことがどんなに大切なことであるかを教えてくださいました。主イエス様に仕えるように、隣人を受け入れ譲り合って過ごす生活、主イエス様にある平和で穏やかな生活へと導いてくださいました。まだまだ失敗する者ですが、私のうちにおられる主イエス様が働いてくださり、自我の支配から、主イエス様のいのちに支配される家庭へと変えてくださっています。

12 人の証し

Unser HERR lebt

みことばの戸が開いて光が差し込むと

藤田 恭子



ご主人の瑛二さんと

私は一九四七年、青森県弘前市に生まれました。父は呉服商を営んでおり、兄弟は三人です。私は一九七〇年に結婚し、子育てと家のこと一切をやってきました。現在は主人と二人で茨城県日立市に住んでおります。

私は、息子が一歳半を過ぎたときに、「よりよく人生を生きたい」と思い、「婦人の友」の愛読者の集まりである「日立友の会」に入りました。「友の会」の創立者の思いを知ろうと、近所の聖書の勉強会にも参加しました。しかし、当時の私は、この世の中には宗教がいろいろあり、教会も教団もいろいろあるけれど、どの道から登っても一つの神に到達するだろうと思っておりました。

「友の会」に入会して数年は喜んで集いましたが、だんだん疲れてきました。「家庭は簡素に、社会は豊富に」との会の目標はとても素晴らしいのですが、私は毎日忙しく、ついていけなくなりました。そして、友の会をやめよう、聖書の勉強会に行くのもやめようと思いました。そう決心したある日の夕方、家で夕食の準備をしていると、天からの声とでもいうのでしょうか、「このままでいいのだよ」とどなたかが、小さく、優しく私の心に語りかけてくださるのです。「このままでいいのだよ、おいで」と繰り返すのです。私は、「神様だ。あなたは、まことの神様」と気づかされました。かたくなに神を拒んでいる私に、まことの神様が呼びかけてくださっていると思い、涙があふれました。私は「このままでいいのですね。神は愛なり、神は愛なり、まことの創造主は愛のお方」と応答しました。いまでもそのときのことを思い出すと、心が温かくなります。

その日から、聖書を開くのが楽しくなりました。以前は、聖書を開けば、「…しなければならない」、「…をしなさい」の文字ばかりが目に入りました。しかし、このときから聖書のみことばの一つひとつが、恵み、憐れみとなりました。

私は神様について行きたいと思いました。聖書の研究会に集っていた友人数名と教会を探し回り、洗礼を受けました。このとき、息子は中学二年生、娘は小学四年生でした。

さて、私はキリスト者となり、これからどのようにして生きて行ったらよいのかと思い巡らしていたところ、二ヶ月もしないうちに、「すべて他人をさばく人よ。あなたに弁解の余地はありません」（ローマ 2・1）のみことばが、心に差し込んできました。このみことばにギクリとしました。主イエス様は、私の子育ての暗闇に光を与えてくださいました。

それまでの私の子育ては、「良い教育は良い生活をさせること」をモットーに、「早く寝なさい」、「早く起きなさい」と子どもたちに号令をかけ、コントロールするものでした。私が見てあげないと、子どもたちは前に進まないとばかり、支配し、裁いていたのです。しかし、上の子が中学生になり、思春期に入り、だんだん親の言うことを無視し、反抗するようになり、それまでの叱咤激励では手に負えなくなってきました。カウンセラーの講座に参加したり、親子関係の本を読んで良い方法を取り入れようとしましたが、実行はできませんでした。どうしたら良いのか不安でした。しかし主イエス様は、私に祈ることを教えてくださいました。子どもたちを学校へ送り出した後、聖書の前に座り、「私は息子と関係を良くしたいです。信頼関係をもって家族が穏やかに話し合うようにしたいです。どうぞ、私にあなたの愛をください」と叫び続けました。ところが、祈ってなん

とか良くしようと思えば思うほど、私と息子との関係がますます悪くなってゆくのです。息子は私を無視したり、呪(にら)みつけたりします。私は、ここで負けたら親の権威が保てなくなると思い、子どもと争う嵐の毎日でした。

子どもたちが学校へ行った後、ひとり私は主に「私は愛がありません」と泣いて祈る日々でした。そのようなある日、イエス様が十字架の上で流された血は私の罪を赦すためだったと知らされました。そして、「私には子どもを生かす言葉がまったく出てきません、まったくないのです。私自身はいつも主に告白して赦していただいているのですが、私には子どもを赦し、受け入れる愛がないのです。まったく絶望です」という祈りへと導かれました。しかし、ある本の中に、「サタンに勝利された方はただおひとり、イエス様だけ」という言葉を見い出したことから、「主よ、私は駄目です。敗北です。どうぞ、イエス様、あなたが出てください。憐れんでください。イエス様、あなたが勝利者です」という祈りに変えられました。それからしばらくして、気がついてみると、いつの間にやら我が家の家庭の空気が変えられておりました。食後家族がくつろいで、その日の出来事を話し、穏やかに団欒(だんらん)しているのです。これは主がしてくださったことでした。冷たい空気の家族からイエス様のいのちの流れる家庭へと変えてくださったのです。

私は息子との関係を通して、子どもを主にお委ねすることを学ばせていただいたのです。主イエス様は、私の大切な宝である子どもを全責任をもって握ってくださり、導いてくださり、私もイエス様にある平安をいただきました。

私は、神に生きるために、律法によって律法に死にました。私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。

(ガラテヤ　2・19〜20)

その後、私は洗礼を受けた教会を去りました。息子は高校生、娘は中学生になっていました。私は教会生活を続けているうちに、みことばに従おうと自力で励むことに疑問をもち、悩み苦しみました。その間、「主イエス様、私に具体的にわかるように教え導いてください」と叫ぶ日々でした。主はいろいろな信仰の書物を通し、御霊に導かれる信仰生活へと導いてくださいました。

あなたの神、主が、この四十年の間、荒野であなたを歩ませられた全行程を覚えていなければならない。それは、あなたを苦しめて、あなたを試み、あなたがその命令を守るかどうか、あなたの心のうちにあるものを知るためであった。

(申命記　8・2)

一九八九年、私の大好きだった姉が急死しました。このとき主は、私と主人との関係に剣を投げ込み、私の本質を明らかにされました。それは、姉の葬儀のときの控室に皆が集っていたときでした。どなたかが、「男性は奥さんが亡くなると、すぐ後の人をもらうのよね」と言ったのです。私は頭から水をザアーとかけられた気がしました。「まさか、そんな」と思いました。姉は一生懸命家族のために尽くし、節約し、我慢してやってきたのに、別の奥さんが来て首のすげ替えとは、姉があまりに可哀そうです。自宅に帰り、私は葬儀で聞いたことを主人に話しました。そして、「あなたも私が亡くなったら、新しい奥さんをもらうの」と尋ねました。すると、主人はあっさり、「そうだなあ、ひとりでは暮らせないから、再婚するだろうなあ」と言うのでした。私は主人の言葉に、またショックでした。このときから私は主人に心を閉ざし、冷たい態度をとるようになりました。私は、「主人には愛がない、私の気持ちをわかってくれない」と主人を責め、自己憐憫に落ちていきました。

肉の思いは死であり、・・・

(ローマ　8・6)

自我に支配されてしまうと、孤独と破壊と悲惨です。しばらく冷たい灰色の日が続きました。私は慰めが欲しい、元気が欲しいと思い、イエス様のところに行き、静まり、正直に打ち明けました。すると、主は「わたしがいるではないか」と答えてくださいました。私の気持ちをわかって欲しいと主人に期待するのが間違いでした。私の心は定まりました。

わが子よ。あなたの心をわたしに向けよ。
（箴言　23・26）

彼に信頼する者は、失望させられることがない。
（ローマ　10・11）

私は自分の心を「主イエス様、御手に委ねます」と明け渡しました。私は主のもの、主は私のものです。私の心は喜びにあふれました。

さらに、主はこの問題をここで終わりとはしませんでした。私の心の奥に根をおろしている罪を明らかにしてくださいました。そのきっかけは、私と娘が居間で会話していたときでした。主人の話になり、私は心の中にある主人に対しての苦々しい思いを、「お父さんは自分のことしか考えないのよ」と、刺のある口調で話していたのです。そのとき、私の心の暗闇に光が差し込みました。私は、父親の悪いイメージを娘に吹き込んで娘を味方につけ、娘と父の信頼関係を破り裂いて、主人を除け者にしようとしている、とハッとしました。これはサタンの手口です。このまま、自我の奴隷になっているならその先は家庭崩壊、と知らされました。

自分のいのちを愛する者はそれを失い、この世でそのいのちを憎む者はそれを保って永遠のいのちに至るのです。
（ヨハネ　12・25）

私は、「主よ、赦してください。主よ、憐れんでください。あなた様は、私の自我を引き受けてくださいました。死んでくださいました。私の古い人は共に十字架につけられました。すでに死んだことを感謝します。死んでしまった者は、罪から解放されています。もはや、私が生きるのではなく、イエス様が代わりに生きて対応してくださいますから、ありがとうございます」と叫びました。私は心に悪い思いが湧いてくるたびに、心の中でみことばを繰り返し祈りました。

私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。
（ガラテヤ　2・20）

サタンはたびたびいざないます。しかし、ただ主を仰ぎ見ていたら、主イエス様は私を解放してくださいました。

私たちは、やみのわざを打ち捨てて、光の武具を着けようではありませんか。
（ローマ　13・12）

そうこうしているうちに気がついてみると、主人に対しての苦い思いが、私の心の底から消えてなくなっていました。

私は切なる思いで主を待ち望んだ。主は、私のほうに身を傾け、私の叫びをお聞きになり、私を滅びの穴から、泥沼から、引き上げてくださった。そして私の足を巌の上に置き、私の歩みを確かにされた。
（詩篇　40・1～2）

主人との問題を通して、私は自分の真の姿を見せられました。自分の性質は、生まれながらに呪われ、神を喜ばせることができない悪であることを知りました。

あなたがたはすでに死んでおり、あなたがたのいのちは、キリストとともに、神のうちに隠されてあるからです。
（コロサイ　3・3）

あなたがたは、神によってキリスト・イエスのうちにあるのです。キリストは、私たちにとって、神の知恵となり、また、義と聖めと、贖いとになられました。
（1コリント　1・30）

わがたましいは主をあがめ、わが霊は、わが救い主なる神を喜びたたえます。
（ルカ　1・46～47）

一九九二年、思いもかけない方法で、私はキリスト集会に導かれました。息子は大学生、娘は高校生でした。まもなく、主人は家庭集会に参加するようになり、翌九三年八月、西軽井沢

国際福音センターで、洗礼の恵みにあずかりました。

事は人間の願いや努力によるのではなく、あわれんでくださる神によるのです。（ローマ　9・16）

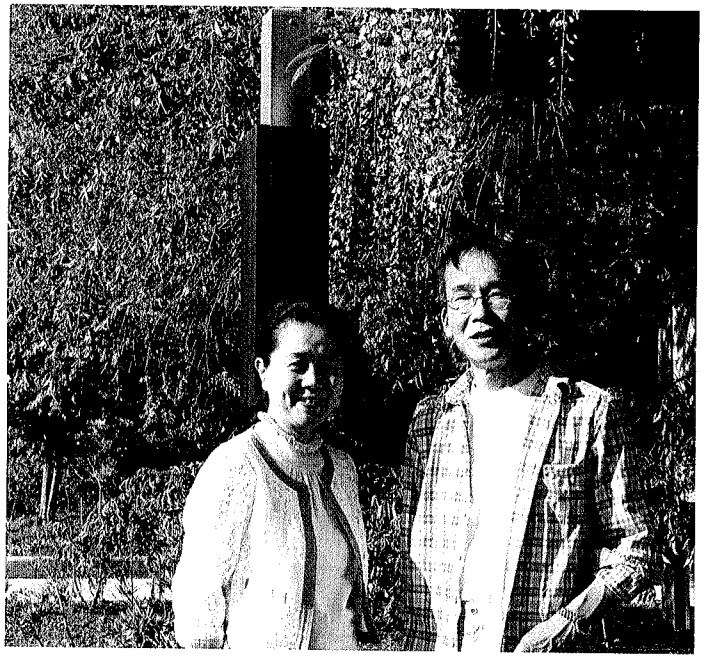
藤田恭子
一九四七年、青森県弘前市生まれ
弘前中央高等学校、東北女子短期大学　卒業
夫　瑛二

私は集会の葬儀に参加させていただいて、死ぬことは終わりではないこと、主イエス様のみもとへ行くことである、との確信をいただきました。「アーメン、主イエス様、来てください。私は待ち望んでいます」。私は主イエス様の御顔を見て感謝する日を待ち望んでいます。

私と私の家とは、主に仕える。（ヨシュア　24・15）

主のあわれみは尽きません
——わがまま放題の果て

井上　俊之



妻の衣里子さんと

もしあなたのみおしえが私の喜びでなかったら、私は自分の悩みの中で滅んでいたでしょう。（詩篇　119・92）

私ども夫婦は今年で結婚二十年になります。しかし、娘が五歳のときから六年半別居しておりました。その後、主が戻してくださいまして、家族が一緒に暮らして七年目を迎えています。この春に娘が大学に進学し、一人暮らしを始め、私たち夫婦二人の生活になりました。本当に、あっという間に娘は巣立っていったと感じています。とにかく、親の身勝手から、娘には辛い悲しい思いをさせて、済まなかったと思っています。

愚か者を臼に入れ、きねでこれを麦といっしょについても、その愚かさは彼から離れない。（箴言　27・22）

まだイエス様を知らなかった二十四歳のとき、何かを求めてインドへ行きました。何とかなると思っていましたが、わがままと放縦、無責任とごう慢の果てに行きついたのは、二度の肝炎とノイローゼ、そして絶望でした。

あるとき、自分は何をしてきたのだろう、と愕（がく）然としました。自分が良いと思い、好きなようにやってきたせいで、自分自身はおろか、親や周りの人たちを苦しめ、悩ませていたことがよくわかりました。それまでかかわったすべての人に謝りたいと思いましたが、どうすることもできませんでした。人生に行き詰まって、どこにも希望は見出せず、自分こそがあらゆる問題のもとであると思わされました。加えて、二度の肝炎で、このまま行けば四十歳くらいで肝硬変・肝がんコースをたどるのではという恐れも加わり、ノイローゼ状態で、世界中に身の置き所がない、いっそ消えてなくなりたいと思っていました。一度、精神科を受診しましたが、医者はまともにこちらの顔も見ず、「薬を出しましょう」と言いました。「この先生には人生がわかっていない」と思わされ、信頼できませんでした。待合室で会った同じ年頃の女性から「私はもう、八年ここに通っています」と聞いて、「あぁ、やっぱり医者でもだめなんだ」と絶望が深まるばかりでした。ちょうどそのころ、旅で会った一人の友人が帰国後、自殺したと知りました。瞬間的に、「あぁ自分のせいだ」と思いました。どういうわけでそう思ったのかもわからないのですが、その時は、そうとしか思えませんでした。本当にショックでした。自分がもし自殺したら、周りの人にこんな思いをさせるのかと思うと、自殺はできませんでした。生きるしかない。けれどもどこにも希望が見出せない。ただ、もう死んだように生きていくしかないんだ…と絶望に行き着いたのです。そんなころ、旅で出会った友人が、聖書を持って訪ねてきてくれました。聖書を見たとき私は、こんな厚い本を読むのは無理だ、と思いました。勉強しなければいけないのだったら、とても無理だと思ったわけです。二度目にその友人が訪ねてくれたときに、開いて見せてくれた聖書の箇所がマタイの福音書でした。

求めなさい。そうすれば与えられます。捜しなさい。そうすれば見つかります。たたきなさい。そうすれば開かれます。だれであれ、求める者は受け、捜す者は見つけ出し、たたく者には開かれます。あなたがたも、自分の子がパンを下さいと言うときに、だれが石を与えるでしょう。また、子が魚を下さいと言うのに、だれが蛇を与えるでしょう。

してみると、あなたがたは、悪い者ではあっても、自分の子どもには良い物を与えることを知っているのです。とすれば、なおのこと、天におられるあなたがたの父が、どうして、求める者たちに良いものを下さらないことがありましょう。

（マタイ　7・7～11）

私がイエス様と出会ったのは二十八歳のときでした。それまでの私の歩みは、高ぶりと恥に尽きます。人を人とも思わず、何ら根拠のない自信と高慢、それと裏腹の卑屈。人に厳しく、自分に甘い。そういう自分を自覚しながら、どうすることもできませんでした。自分の陰険さを自覚していましたから、「人の心は何よりも陰険で、それは直らない。だれが、それを知ることができよう」（エレミヤ　17・9）、とのみことばに出会ったとき私は安心しました。「あぁ、みんなそうなんだ」と思ったからです。

自分のことだけを求めて、結局絶望するしかなかった者であります。何をやっても自分はだめだと知り、何の希望も持ちえなかった者に、主は、「求めなさい。そうすれば与えられます」と言ってくださいます。生きていて良いのだと言ってくださるのです。そのままでいいのだと言ってくださるのです。こんなにも力強くはっきりと約束してくださるお方は神様に違いない、とストンと腑（ふ）に落ちた思いがいたしました。「あぁ、求めていたのはイエス様だった」という感じでした。それまでの孤独、言いようのない焦燥感、絶望感が拭い去られた気がして、生きることの重荷を降ろすことができました。二度目の肝炎以来、いつも過敏に体調に不安を覚え、脇腹に違和感を感じていましたが、それも気にならなくなりました。わがまま放題の末、苦しみを通されて、主に出会うことができたことを感謝しております。とはいえ、そのころは本当に打ちひしがれていて、自分を受け入れられない状態でしたから前向きになれず、また定職もなく、自分の立ちどころがわからず、人と落ち着いて話すこともできない状態でした。対人緊張が強く、交わりもほとんど持てませんでした。ただ、救いをいただいた、ということだけを握っておりました。このころ、ベック兄は「聖

書に書いてあるから信じます。これだけだよ」、だから「イエス様に信頼しましょう」と言ってくださいました。

しばらくして私は、自分が本当に救われているのか、わからなくなってしまいました。あるトラクトに「あなたは、本当にクリスチャンですか?」とあるのを読んで、不安になってしまったのです。なにか、特別な体験をしなければならないのだろうか、とあれこれ考えて何ヶ月か経ちました。考えても頭を抱え込んでしまうだけのことを何度も繰り返したある朝、「だめだ」と思った瞬間、「あぁっ、そうか、イエス様がもうすべてなさってくださったのだ。だから大丈夫なのだ」と、突然、心が軽くなり、感謝にあふれました。ベック兄が、「イエス様に信頼しましょう」とおっしゃったのはこういうことだったのだ、兄弟姉妹の喜びはこのゆえだったのだ、とわかる気がしました。周りの世界は光に満ち、輝いていました。なにより、聖書のすべては恵みに満ちているということが良くわかりました。何年か経って、それまであきらめていた結婚を主に求める思いになりました。主が自分を造られたのだから結婚相手も備えてくださっているのでは、という思いが与えられ、祈り始めました。

そのような時、新しい仕事と併せて結婚話が舞い込みました。それまで関わっていたことを続けることへの確信が持てず、悩んでいた時でもありました。

あなたが右に行くにも左に行くにも、あなたの耳はうしろから「これが道だ。これに歩め。」と言うことばを聞く。

（イザヤ　30・21）

このみことばに力づけられて、長野県上田市に引っ越してきました。ちょうど御代田の福音センターができた年でした。結婚話は破談になりましたが、新しい仕事に就きました。始めてみると、その仕事はまったく喜べない仕事であることがわかりました。それを続けていくことは、無理なように思えました。しかし、この仕事も主が与えてくださったのだから、主の手から受けようと決心したときに、仕事に喜びが与えられました。

それから一年後、妻になる衣里子姉妹を紹介され、トントン拍子に話が進み、出会って二ヶ月ほどで結婚することになりました。

幸いなことよ。悪者のはかりごとに歩まず、罪人の道に立たず、あざける者の座に着かなかった、その人。まことに、その人は主のおしえを喜びとし、昼も夜もそのおしえを口ずさむ。その人は、水路のそばに植わった木のようだ。時が来ると実がなり、その葉は枯れない。その人は、何をしても栄える。

（詩篇　1・1〜3）

このみことばに押し出されて決意しました。おそらく、時間を置けばまとまらなくなることを主はご存知だったのではないかと思います。結婚生活は最初こそ良かったのですが、次第と不協和音が生じてまいりまして、いろいろな問題が与えられ、いさかいが多くなっていきました。始めのころこそ、「あぁ、こうして世の夫婦は破綻に至るのかな」と他人事のように思っていましたが、やがて、これは他人事ではないぞ、となり、あれよ、あれよという間にドッシャーンとなってしまったのです。ただ、これも、主がなさったことで、主が支配しておられ、責任を取ってくださると言う思いが与えられていました。いつかはわからないけれども、主が必ず戻してくださる、たとい地上では無理であっても、天に望みをつなごうと思うことができました。どういうふうにかはわからないが、主が最善をしてくださるということだけは握っていたいと思っていました。

あなたが受けようとしている苦しみを恐れてはいけない。…あなたがたは十日の間苦しみを受ける。死に至るまで忠実でありなさい。そうすれば、わたしはあなたにいのちの冠を与えよう。

（黙示　2・10）

この箇所が目に飛び込んできたことがあります。そのとき、「十日の間」とありますので、もしかしたら、今日は九日目かもしれない、と解釈し、とにかく今日一日、もしかしたら、九日目の今日を生きようと思いました。

いなご、ばった、食い荒らすいなご、かみつくいなご、わたしがあなたがたの間に送った大軍勢が、食い尽くした年々

を、わたしはあなたがたに償おう。あなたがたは飽きるほど食べて満足し、あなたがたに不思議なことをしてくださったあなたがたの神、主の名をほめたたえよう。わたしの民は永遠に恥を見ることはない。あなたがたは、イスラエルの真中にわたしがいることを知り、わたしがあなたがたの神、主であり、ほかにはないことを知る。わたしの民は永遠に恥を見ることはない。（ヨエル　2・25）

「主が償ってくださる」ことは常識的には考えられない約束のように思いました。でも、そのことを握り締めて過ごせば良いのだ、と思いました。実際に目に見えるところは、厳しく淋しい、そして辛い現実でした。中でも私を苦しめたのは、かわいい盛りの娘との交わりを失ってしまった喪失感でした。そのような状態でしたが、主の前に出るときだけ、喜びがありました。主は真実なお方であることを証しすることができます。

別居していた七年近くの間、感謝なことに集会に繋がり続けることができ、折りに触れてふさわしい交わりも備えられ、励ましをいただいておりました。しかし、もしこの世の中に戻ってしまったら、また同じ苦しみを繰り返し味わうに違いない、という恐れもありました。。

結婚の時に、ある兄弟は、「二人が幸せになるための結婚というより、すでに主イエス様を知って幸せになった二人が共に主に仕え、証しするための結婚」と祈りの中で語ってくださっていました。ベック兄も「自分のために結婚するなら、しないほうが良い」とよくおっしゃっておられます。しかし、現実の私は自分のことを優先し、自分の都合や好みなど、自分のことしか考えられない者でした。今は、自分の願いや欲求を通そうとする者との生活は、妻にとって喜びとは程遠いものであり、悩みであったことがわかります。

夫たちよ。妻が女性であって、自分よりも弱い器だということをわきまえて妻とともに生活し、いのちの恵みをともに受け継ぐ者として尊敬しなさい。（1ペテロ　3・7）

妻は私との生活に疲れ、痛んでしまったところに、義母の介入があり、別居にいたりました。しかし、主は、回復させてくださいました。「私たちの信仰が・・」とか「私の祈りが・・」ということではなしに、ただただ主のあわれみのゆえに主がなしてくださった、と申し上げることができます。その背後には兄弟姉妹の熱いお祈りがあったことを感謝しています。

別居が解消したころ娘はもうすでに反抗期、思春期でしたので、最初は、私と同じ空間にいることにすら耐えられない、という状態でした。無理な引越しも重なって、しばらくは学校に行けなかったり、一時はどうなってしまうのかという危惧や恐れ、あれこれ思い煩うこともあったのですが、一つひとつ、主はあわれみによって導き、立て直してくださり、私たちの思いを超えて主が働いてくださいました。主は、娘をもまたこよなく愛してくださり、ご自身の瞳のように守ってくださったことがわかります。娘と私の関係がまだ厳しかったころに、若い姉妹が、「二十歳になれば大丈夫ですよ、回復するから」と言ってくださいました。そこを通ってきた方のことばには現実味があり、指折り数えて過ごしてまいりました。娘はこの春、進学し、家を離れ一人暮らしを始めました。私たち夫婦の手元を離れ、主にお任せし、祈るばかりの日々です。

私たちは真実でなくても、彼は常に真実である。（2テモテ　2・13）

私たち夫婦は、どうしようもない者であり、気がつけば角つき合わせているような者です。これからも、主のあわれみと守りがなければどうにもならない者です。主はご自身の真実にかけて、私たち家族を扱ってくださり、導き、立て直してくださいました。主は、家族の救いを一つひとつ実現してくださっています。突然召された義母の最期の思いがどのようであったかはわかりませんが、主は間違いなく義母をお取り扱いくださり、天国に召してくださったこと、確信しています。その後、義父を最期の四ヶ月我が家に引き取ることができ、主は父娘の間を修復してくださり、集会での葬儀を通して、しばらく親交の途絶えていた親族に証しする機会を与えてくださいました。いま、義父母は天で和解もできて、主と共に、光のうちに

喜びのうちに憩っておられます。

イエス様を信じて歩む人生は、確かにいろいろなところを通されますが、天国行きのバスに乗って旅をしているようなものです。次の町はどこか、到着時刻もわからないのですが、不安や心配、思い煩いは要りません。「もし、あなたがまだ天国行きのバスにお乗りでないなら、ご一緒しませんか？楽しいですよ。いえいえ切符は要りません、ただです。イエス様が支払ってくださいました。どうぞ遅れないうちに！」との、そんな思いで昨年末から上田で家庭集会を開かせていただくようになりました。

主よ。あなたは、あなたのなさったことで、私を喜ばせてくださいましたから、私は、あなたの御手のわざを、喜び歌います。
（詩篇　92・4）

私たちにではなく、主よ、私たちにではなく、あなたの恵みとまことのために、栄光を、ただあなたの御名にのみ帰してください。
（詩篇　115・1）

私たちが滅びうせなかったのは、主の恵みによる。主のあわれみは尽きないからだ。それは朝ごとに新しい。「あなたの真実は力強い。主こそ、私の受ける分です。」と私のたましいは言う。それゆえ、私は主を待ち望む。主はいつくしみ深い。主を待ち望む者、主を求めるたましいに。主の救いを黙って待つのは良い。人が、若い時に、くびきを負うのは良い。それを負わされたなら、ひとり黙ってすわっているがよい。口をちりにつけよ。もしや希望があるかもしれない。自分を打つ者に頬を与え、十分そしりを受けよ。主は、いつまでも見放してはおられない。たとい悩みを受けても、主は、その豊かな恵みによって、あわれんでくださる。主は人の子らを、ただ苦しめ悩まそうとは、思っておられない。
（哀歌　3・22～33）

井上俊之
一九六〇年群馬県生まれ
桐生南高等学校、日本大学農獣医学部拓殖学科卒
大丸合成薬品㈱勤務
妻・衣里子　長女・ナオ

神のわざがこの人にあらわされたのです
――わがままをこじらせて

井上　衣里子



後列左から夫の俊之さん、衣里子さん、みなさんと

イエスはこれを聞いて言われた。「医者を必要とするのは丈夫な者ではなく、病人です。『わたしはあわれみは好むが、いけにえは好まない。』とはどういう意味か、行って学んで来なさい。わたしは正しい人を招くためではなく、罪人を招くために来たのです。」
（マタイ　9・12～13）

いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべての事について、感謝しなさい。これが、キリスト・イエスにあって神があなたがたに望んでおられることです。
（1テサロニケ　5・16～18）

二十年前、結婚したばかりのころ、夫から「僕は、あなたが家にいて、喜んでいてくれたらそれでいいんだ」と言われました。最近も、「疲れ果てて、いらいらしているお母さんより、ただ、喜んでいるお母さんを求めているんだよ。娘が手伝ってくれるよ。喜んでいればいいんだ」と言われました。

重要なのは神の命令を守ることです。（1コリント　7・19）

私は小さいころから信じる対象を求めていましたが、主が目を留めて手を差し伸べてくださり、恵みによって私は主と出会うことができました。

人の子は、滅んでいる者を救うために来たのです。
（マタイ　18・11）

わたしは、あなたがたに言います。求めなさい。そうすれば与えられます。捜しなさい。そうすれば見つかります。たたきなさい。そうすれば開かれます。だれであっても、求める者は受け、捜す者は見つけ出し、たたく者には開かれます。（ルカ　11・9～10）

私は一九五九年、東京都江戸川区に生まれました。弟が一人います。両親は、ビニール加工業を営み、物心ついたときには、住み込みの従業員のお姉さんたちと生活していました。母は、経営のことでよく父と対立していました。幼稚園児のころ、両親を見ていて、母が家を出て行ったら私は生きていけないと思いました。そういう不安な気持ちでいましたから、すぐに泣き出す子どもでした。幼稚園の先生には、何で泣いているかわからない子、だったと思います。小学生くらいまでその不安の中にいました。ですから、母のそばにいること、母に嫌われないようにすることが、私が生きていく上で大切なことになりました。朝早くから夜遅くまで働いていた両親を困らせたり、手を煩わせることをしないように、進んで手伝いをすることで自分を落ち着かせていたように思います。

中学生のころは、学校が楽しくなり、不安になることは少なくなりましたが、「私に従っていれば間違いない」という母のそばで、身近な相談相手、愚痴の聞き役でした。聞いたことは、ただ胸の奥にしまっていました。

またイエスは道の途中で、生まれつきの盲人を見られた。弟子たちは彼についてイエスに質問して言った。「先生。彼が盲目に生まれついたのは、だれが罪を犯したからですか。この人ですか。その両親ですか。」イエスは答えられた。「この人が罪を犯したのでもなく、両親でもありません。神のわざがこの人に現われるためです。（ヨハネ　9・1～3）

このみことばを見つけたときの喜びは忘れられません。父と母の関係の悪さから、徐々に父との距離は遠くなりました。そのような者でしたが、両親のおかげで大学を卒業し、就職しました。そのころから両親は体調を崩し、家業も細々と続ける状態になっていました。

私は三十歳のころに一人暮らしを許されました。会社から帰ってテレビを点けて夕食の準備をしていると、大好きな女優の山本陽子さんの声が聞こえてきたので、すぐテレビの前に座りました。詩が朗読されていましたが、あっという間に番組は終わってしまいました。私はその詩が気になり、翌日テレビ局に電話をかけましたら、「あの番組でしたら、『死は終わりではない』という山川千秋さんの本が出版されています」と教えていただきました。翌日会社の帰りに本屋さんでその本を見つけ、電車の中で目的の詩を探し、「病者の祈り」という詩を見つけました。

12 人の証し Unser HERR lebt

大事を成そうとして力を与えてほしいと神に求めたのに
慎み深く従順であるようにと弱さを授かった
より偉大なことができるように健康を求めたのに
よりよきことができるようにと病弱を与えられた
幸せになろうとして富を求めたのに
賢明であるようにと貧困を授かった
世の人々の賞賛を得ようとして権力を求めたのに
神の前にひざまずくようにと弱さを授かった
人生を享楽しようとあらゆるものを求めたのに
あらゆるものを喜べるようにと生命を授かった
求めたものは一つとして与えられなかったが
願いはすべて聞き届けられた
神の意にそわぬ者であるにかかわらず
心の中の言い表せない祈りはすべてかなえられた
私はあらゆる人々の中で最も豊かに祝福されたのだ
～ニューヨーク・リハビリテーション研究所の壁に書かれた二患者の詩～

この詩は、吉祥寺キリスト集会のゴットホルド・ベック宣教師が山川千秋さんに贈った詩だと書いてあり、私もベックさんに会ってみたいと思いました。番号案内で吉祥寺キリスト集会の電話番号を調べ、電話をかけました。何日目かでようやく通じ（集会所のピンク電話だったそうです）、日曜の礼拝と火曜の学び会の時間、住所と道順を教えてくださいました。勇気を出して日曜日に吉祥寺集会を訪ねてみました。会堂の扉を開けて右手の書棚から聖書と聖歌を借りて、空いていた一番後ろの席に座りました。兄弟方が聖書を読んでお祈りしているのを聞いてもわかりませんでした。でも、聖歌での賛美の時は、「あ、私も歌える！」と思ってうれしくて歌いました。聖歌が歌われるたびに私は、涙がこぼれてこぼれて仕方ありませんでした。そして、私の胸の中に、「衣里子よく来たね。衣里子の涙の壷は涙で一杯だね。ここで空っぽにして帰りなさい。そして一週間経ったら、また、一杯になっているからまた来なさい」という声が響いてきたのです。こうして吉祥寺集会に集い始めたところ、あるご婦人から、「あなた先週も泣いてたわね、お住まいは？」と聞かれ、「市川です」と答えたら、市川集会の姉妹を紹介してくださいました。同じ年の姉妹を紹介していただき、家庭集会やキャンプにも連れていっていただきました。私はイエス様に出会い元気になり、明るくなりました。母もそのころ、衣里子は集会に行くようになって元気になった、と言っていました。

主は荒野で、獣のほえる荒地で彼を見つけ、これをいだき、世話をして、ご自分のひとみのように、これを守られた。
（申命記　32・10）

人生の海の嵐に、もまれ来しこの身も不思議なる神の手により、命拾いしぬ。いと静けき港に着き、我はいま休ろう。救い主イエスの手にある身はいとも安し
（聖歌472番）

また、同じころ、私は三浦綾子さんの小説を読んでいました。三浦綾子さんに、「私は心が風邪を引いてしまいました。どうして良いのか解りません」と手紙を書いたところ、「心が風邪を引いてしまったら大変。私が所属している教会があなたの住んでいる市川市に三つありますので紹介します。残念なことに、市川には知り合いの牧師がいませんけど」と書かれた返事をいただきました。お返事をいただいたうえに、教会まで紹介してくださったのですから、電話をしないのも失礼かと思い、一番近い教会に電話をしました。電話口に出てくださった方が、まるで小学生に対するように、いきなり、「どうしたの？学校でいじめられているの？お母さんに叱られたの？」と話されました。私はそのときもう三十歳を過ぎていて、「先日電話した者はこの私です」とは言い出せずに、その教会に行くことをストーンと閉ざされました。これもイエス様のみこころでした。

集会に集うようになって二年ほどしたころに、集会の姉妹から井上俊之兄弟を紹介していただいて結婚しました。ベック兄は母に、「善は急げだよ」と言ってくださいました。私と母の関係は一言では言い表せない複雑な関係でしたから、二ヶ月という短時間で結婚に至ったのも神様のご計画と感謝しています。

それゆえ、人はその父と母を離れて、ふたりの者が一心同体になるのです。それで、もはやふたりではなく、ひとりなのです。こういうわけで、人は、神が結び合わせたものを引き離してはなりません。
（マルコ　10・7～9）

私たち夫婦は娘が五歳のときに別居しました。娘が東京の国立小児病院で股関節脱臼の入院治療をしなければならなくなり、しばらく実家にいるうちに、次第に母が、私たちの家庭への支配を及ぼしてきました。言い訳になりますが、小さいころからの母との関係もあり、私は、夫より母に相談し、母に従う者でした。私と母の関係がどうであれ、単純にみことばを握り締めて、夫に従えばよかったのでしたが、それができませんでした。そのころの自分は、まさに次のみことばのとおりの者でした。

私は、愚かで、わきまえもなく、あなたの前で獣のようでした。
（詩篇　73・22）

妻たちよ。あなたがたは、主に従うように、自分の夫に従いなさい。
（エペソ　5・22）

12 人の証し Unser HERR lebt

人はみな、上に立つ権威に従うべきです。神によらない権威はなく、存在している権威はすべて、神によって立てられたものです。したがって、権威に逆らっている人は、神の定めにそむいているのです。そむいた人は自分の身にさばきを招きます。（ローマ　13・1～2）

別居していた六年半、実家での両親と私と娘の四人での生活は厳しいものでした。「あぁ、間違っていたんだなぁ」と感じながらも、どうしていいかわからず、波風を立てないようにするのが精一杯でした。やがて母との関係が破綻し、イエス様は私と娘をあわれんでくださり、不思議な方法で私たちは夫のもとに帰ることができました。自分のことばかりを考えていると不幸になるよ、とベック兄がよくお話になるとおり、私はイエス様から離れて闇の中を歩いていました。しかし、私の人生の失敗の背後に主イエス様がいてくださり、すべてを益と変えてくださったことは感謝です。

こうして夫婦が回復されて七年になりました。この間、母の突然の死があり、また老人施設で生活していた父を引き取って最期の四ヶ月間を私たちと共に暮らすことができました。父と私の間にイエス様が入ってくださって修復が与えられ、尊敬の思いすら持てるようになったことは主の恵みそのものです。

わたしはあなたの前に進んで、険しい地を平らにし、青銅のとびらを打ち砕き、鉄のかんぬきをへし折る。（イザヤ　45・2）

彼らは荒野や荒れ地をさまよい、住むべき町へ行く道を見つけなかった。飢えと渇きに彼らのたましいは衰え果てた。この苦しみのときに、彼らが主に向かって叫ぶと、主は彼らを苦悩から救い出された。また彼らをまっすぐな道に導き、住むべき町へ行かせられた。彼らは、主の恵みと、人の子らへの奇しいわざを主に感謝せよ。まことに主は渇いたたましいを満ち足らせ、飢えたたましいを良いもので満たされた。（詩篇　107・4～9）

わたしは盲人に、彼らの知らない道を歩ませ、彼らの知らない通り道を行かせる。彼らの前でやみを光に、でこぼこの地を平らにする。これらのことをわたしがして、彼らを見捨てない。（イザヤ　42・16）

時々ふと過去や現実に心を向けると、とたんに私は主から心が離れ、発狂しそうになります。「祈ることもできなくなる」と、親しい姉妹に話したら、そのときは賛美するといいよと勧められ、賛美するようにしてきました。

父は私を教えて言った。「私のことばを心に留め、私の命令を守って、生きよ。知恵を得よ。悟りを得よ。忘れてはならない。私の口の授けたことばからそれてはならない。」（箴言　4・4～5）

主を恐れることは、知恵の初め。これを行なう人はみな、良い明察を得る。主の誉れは永遠に堅く立つ。（詩篇　111・10）

ひたすら主を信頼して前進し、決して後ろを振り向いてはならない、と今も自分に言い聞かせています。「主は勝利者だからすべてのことをお任せしたらいいよ」と、励ましてくれる夫のことばに支えられてきました。母は、私が集会に集いだしてから「衣里子は明るくなった」と言ってくれました。結婚式や、娘が生まれてからはよく我が家に泊まり、集会にも来てくれました。ですから夫は、「最期の瞬間に、主はご自身を母に啓示してくださり、光を当ててくださったと思うよ」と言ってくれます。「ああ、お母さんと天国で再会できる」と、思えることは感謝です。

強くあれ。雄々しくあれ。彼らを恐れてはならない。おののいてはならない。あなたの神、主ご自身が、あなたとともに進まれるからだ。主はあなたを見放さず、あなたを見捨てない。（申命記　31・6）

これまで永い間、母との関係が悩みでしたが、最近、自分も母と同じように娘に対して支配的で、自己中心的な自分の姿を見出しました。親子関係も、イエス様が間にいてくださらなければ、正しい関係には立てないことを教えられています。

父たちよ。あなたがたも、子どもをおこらせてはいけませ

ん。かえって、主の教育と訓戒によって育てなさい。
（エペソ　6・4）

私は人を愛することができず、許すこともできない者。すぐに怒りをかき立て、いきどおる者です。私にはイエス様の十字架がどうしても必要でした。イエス様は、このようなみじめであわれな私に目を留めてくださり、忍耐強くお導きくださいました。感謝です。イエス様に頼って事を起こすと決めたときには、主は、でこぼこの道は平らにして歩ませてくださり、辛いときには背負っていただきました。夫は、よく泣く私を見て、「あなたの涙は悲しみ、悔しさの涙だね。喜びの涙を流そう、心を主イエスに注ぎだすんだよ」、と言ってくれました。そういう私たちの会話を聞きながら、幼子のような笑顔の娘を見ることができました。イエス様を悲しませることしかしてこなかった私に、「わたしはあなたがたを友と呼びました」（ヨハネ　15・15）と言ってくださり、喜びの涙が流れました。私はたくさんの恵みをいただきました。その中で、やはり一番の恵みは主が出会わせてくださった夫です。わがままをこじらせてしまった私に、主は、「たとい、あなたがたの罪が緋のように赤くても、雪のように白くなる」（イザヤ　1・18）と言ってくださるから感謝です。

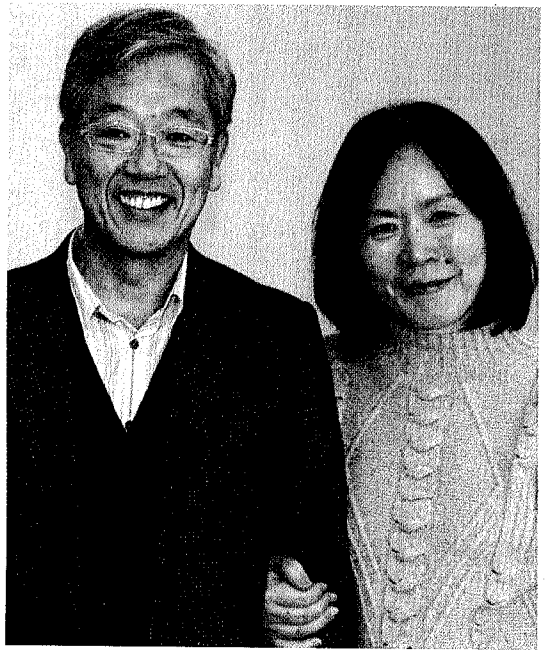
主の祝福そのものが人を富ませ、人の苦労は何もそれに加えない。
（箴言　10・22）

家族全員が、支えあいながら祈り、みことばに従い、へりくだって、求められていることに「はい」と言える、そのようでありたいです。「あなたは、何もさまたげが入らないように気をつけて、ひたすら主なる神がお与えになった働きを続けなさい」（「絶えず祈れ・下巻」）との勧めに従って、これからの人生を歩みたいと思っています。長いこと、私たち家族のためにお祈りくださりありがとうございました。

井上衣里子
一九五九年東京都江戸川区生まれ
和洋女子大学付属国府台中学校高等学校、和洋女子大学文家政学部卒
夫・俊之　長女・ナオ

咎を砕かれ最善の導きへ

松本　昭二



妻の真知子さんと

私は、今から二十四年前、吉祥寺集会で受洗の恵みに与りました。はっきりとした確信のないまま受洗し、中途半端な信仰でしかなかったのですが、イエス様が私の本当の姿を教えてくださり、すべてを最善へと導いてくださり、今も導き続けてくださっています。このイエス様について証しさせていただきます。

私は一九五五年に山口県に生まれ、高校を卒業し、山口県光市にある新日本製鐵光製鉄所へ入社し、そこで同期入社であった妻と結婚し二人の子どもを授かりました。

私は入社当初から東京本社で働くことに憧れていました。先輩方が本社へ栄転し、昇進して戻ってくる、いわば故郷に錦を飾るような姿を見ていたからです。私もそのようになりたいと思っていました。その憧れは叶うことになりました。入社八年目、結婚して三年目、長女二歳、長男が生まれたばかりの時に本社へ転勤となりました。そして、吉祥寺（吉祥寺集会から徒歩五分ほど）にある社宅を、何も考えずに選びました。そのことが、私たち夫婦が後に吉祥寺集

会へ導かれる大きな要因となりました。憧れの本社で営業の仕事、東京での生活です。期待を込めたスタートでした。けれどもその職場は一流大学卒の方がほとんどで、私のような立場の人は二～三人（約五十人の部内で）でした。こういう中でどう仕事をし、どう自己アピールしていけばよいのか、という戸惑いと不安な思いでした。とにかく仕事で結果を出し、認められなければならないという思いで一生懸命仕事をしました。サラリーマンとして多かれ少なかれ誰しも経験する、上司や同僚との関係で悩むこともありました。一時は、上司と「おはようございます」の挨拶をすることにさえ不快感を覚え、会社のビルのドアまで行って会社に入れず、お客様の会社へ直行という日が何度かありました。

けれども次第に仕事も順調になり、ある程度の評価を受けるようになりました。そうすると私の内に芽生えてくるのは高慢です。仕事は頭の良さではなく対応力や応用力で決まる、と思うようになり、実力も顧みず高慢へと進んで行きました。しかしその結果は満足感を覚えるものではなく、常に全力疾走で突っ走って、疲れが出てくるだけでした。

陰で自分の隣人をそしる者を、私は滅ぼします。高ぶる目と誇る心の者に、私は耐えられません。（詩篇　101・5）

家族に対しても思いやりのない者でした。自分は家族のために頑張って仕事をしている、という気持ちを家族にも押し付けていました。家に帰るのは夜の十一時か十二時でした。残業は仕方がないものの、お客さんの接待と言いながらお酒を飲み、時には麻雀をし、休日も接待ゴルフと言って、自分もこの世を楽しんでいました。家族を思いやる気持ちはありませんでした。子育てに最も手がかかる時に、私は家族のために何もしてきませんでした。言うなれば私の家族は母子家庭状態でしたし、妻に対しては酷い者でした。女性問題という裏切りでも妻を苦しめました。恐らく妻は離婚も考えたことでしょう。このように、家族に対して思いやりのない者、愛のない者、会社では評価されたいという欲望に取りつかれていた自己中心の最たる者でありました。

あなたがたは自分の罪過と罪との中に死んでいた者であって、そのころは、それらの罪の中にあってこの世の流れに従い、空中の権威を持つ支配者として今も不従順の子らの中に働いている霊に従って、歩んでいました。私たちもみな、かつては不従順の子らの中にあって、自分の肉の欲の中に生き、肉と心の望むままを行ない、ほかの人たちと同じように、生まれながら御怒りを受けるべき子らでした。

（エペソ　2・1～3）

私が吉祥寺集会へ集うようになったのは、妻と子どもたちが集会へ集うようになったからです。妻は、集会の姉妹から声をかけていただいたことがきっかけで集うようになりました。妻は、幼少のころからイエス様のことを聞いており、集会へ集うことに問題はなかったようです。子どもたちも子ども集会へ集うようになり、私も妻や子どもたちが集会へ集うことには反対しませんでした。むしろ日曜日の午前中、自分の自由な時間を持てることで歓迎していたくらいです。

そのうちだんだんと妻がイエス様への思いを強く持つようになり、洗礼を受けたいと言いました。洗礼の意味を私は知る由もなく、どこか別世界へでも行ってしまうような感じを受けました。私は反対し、それ以降、聖書や集会の小冊子を私の目の届くところへ置かないように、と信仰すらも取り上げてしまうようなことを言っていました。しかし、その後も日曜日には、妻と子どもたちは集会へと元気に出て行き、楽しそうに帰って来るのを、私は不思議な思いで見ていました。また、楽しんでいるのならいいか、とも思っていました。それから少しずつ妻が誘うようになり、私もどんなところか見てみようという思いもあって家庭集会などに集うようになりました。

初めのころは聖書のみことばに感銘を受けたわけではなく、よく分からない、が本音でした。なぜイエス様が十字架に架かられたのか？十字架以外に救いの方法はないのか？またなぜ神は最初から罪のない人間を造られなかったのか等々、疑問が膨らむばかりで、妻に質問して困らせていました。けれども、集会に集っている人はみな喜んでいる、それは

何処からくるのだろう、という思いがいつもありました。

そのうちそれまでの、なぜ、どうしてという思いがなくなっていました。疑問に対する答えはよく分からずのままでしたが、疑問に思わなくなっていったのです。これも不思議なことでした。それまで反対していた妻の受洗のこともなぜか認めていました。

そのころから私も少しずつ集会への違和感が薄らぐとともに、聖書に書かれているみことばが心に響いてくるのを感じ始めていました。そしてある時、私のような者が洗礼を受けてもいいのだろうか、と妻に独り言のようにつぶやいたことで、はっきりとした確信のないまま受洗することになりました。まだ罪の認識もはっきりとしないままで受洗したのです。

だれが自分の数々のあやまちを悟ることができましょう。
どうか、隠れている私の罪をお赦しください。
（詩篇　19・12）

私は大きな罪を犯してきたにもかかわらず、罪とは気付きませんでした。そればかりか、自分の力で歩もうとすることはイエス様が忌み嫌われることで、神を信じようとしない背信の罪であり高慢です。そのうえ、愛のない、思いやりのない、自分しか愛さないような者です。ですから、受洗した後もいろいろなことで砕かれる必要がありました。

二つのことを通して、イエス様は私との距離を近くしてくださいました。

一つは、東京本社勤務十一年を経て名古屋支店へ一九九二年十一月に転勤となったことによるものでした。当時、古巣の光製鉄所に転勤するものと自分では思っていましたが、意に反して二番行きたくなかった名古屋支店勤務となりました。こうして名古屋集会に集うことになったのです。名古屋集会へ集うようになって数年後、ある兄弟が召されました。その兄弟は奥様と二人で毎週集会の荷物を運び、三十分前に来て礼拝の準備をされ、兄弟姉妹が集うのを笑顔で迎えられます。兄姉は、そのご奉仕を誇ることなく自然にされていました。私は、そのご奉仕を知っていましたし、見ていました。

けれどもご奉仕を何か当然のように受け取っていたのです。感謝ですと思いながらも、礼拝によく遅刻をしていました。心から主を賛美したいという姿勢で礼拝に出席していたのではありませんでした。

語る人があれば、神のことばにふさわしく語り、奉仕する人があれば、神が豊かに備えてくださる力によって、それにふさわしく奉仕しなさい。それは、すべてのことにおいて、イエス・キリストを通して神があがめられるためです。栄光と支配が世々限りなくキリストにありますように。アーメン。
（1ペテロ　4・11）

真の礼拝者たちが霊とまことによって父を礼拝する時が来ます。今がその時です。父はこのような人々を礼拝者として求めておられるからです。神は霊ですから、神を礼拝する者は、霊とまことによって礼拝しなければなりません。
（ヨハネ　4・23〜24）

あなたがたのからだを、神に受け入れられる、聖い、生きた供え物としてささげなさい。それこそ、あなたがたの霊的な礼拝です。
（ローマ　12・1）

私は、その兄弟の召天を通して目が開かれた思いでした。大袈裟な言い方かもしれませんが、目から鱗（うろこ）が落ちるとはこういうことかと思いました。このようにしてイエス様は私の信仰の状態を明らかにしてくださったのです。私はそれまで悔い改めたつもりでいましたが、イエス様に対しても妻に対しても本当の悔い改めをしていなかったとの思いを与えられ、改めて悔い改めに導かれました。名古屋支店勤務は、私の信仰生活に大きな意味を持ったことが後になって気付かされました。すべてがイエス様の導きだと思わされました。

二つ目は、また職場の移動です。今度は名古屋にあるオーナー系の関連会社勤務（出向）です。名目上はその会社の立て直し的なものでしたが、当時私はまだ四十三歳、出向す

る年齢ではなく、どうして私が行くことになったのかという不満を持ち、今まで他の人以上に仕事をしてきたのに、という複雑な思いを持ちながらの移動となりました。

その会社は、新日本製鐵とは企業文化も違い、何をするにも手法が違います。色々な提案をしても受け入れてもらえません。すればするほど拒否反応が強くなっていきます。そうするうちに私個人に対しても拒否反応的な視線を感じるようになってきました。私はこの先どのように仕事をしていけばよいのか、それまで経験したことのないブラックボックスに入ったようでした。それまでは自分が努力していけば進む道は見えていましたし、会社の文化も環境も私には合っていました。それが様変わりです。ストレスを覚え、悩みを覚えました。それまで仕事のことも祈ってきたつもりでしたが、先が見えない不安が大きくのしかかってきて、イエス様に頼らざるを得ない状況に導かれました。そこでようやく仕事のことでも真剣に祈るようになりました。

みことばを通してイエス様が、「わたしに頼れ、わたしが導く」と語ってくださいました。

あなたの道を主にゆだねよ。主に信頼せよ。主が成し遂げてくださる。（詩篇　37・5）

人の歩みは主によって確かにされる。主はその人の道を喜ばれる。（詩篇　37・23）

何度も開いていたみことばでしたが、この時は乾いた土に水が浸み込むように私の心に入ってきました。当時、本当に感謝なことに、妻が私の状態を察してか、毎日会社のパソコンにメールでみことばを送ってくれました。（会社のパソコンの私的利用は問題ですが・・・）

道は見えなくてもなぜか平安でした。イエス様に守られている、そして親愛なる妻もいつも一緒にいてくれる、そういう安心感がありました。私は、自分は仕事ができると思っていましたが、現実にはまったく何もできない者であることを知りました。イエス様は私に、静まって主を待ちなさいと言ってくださいました。静まっていこうと思わされました。

主の前に静まり、耐え忍んで主を待て。（詩篇　37・7）

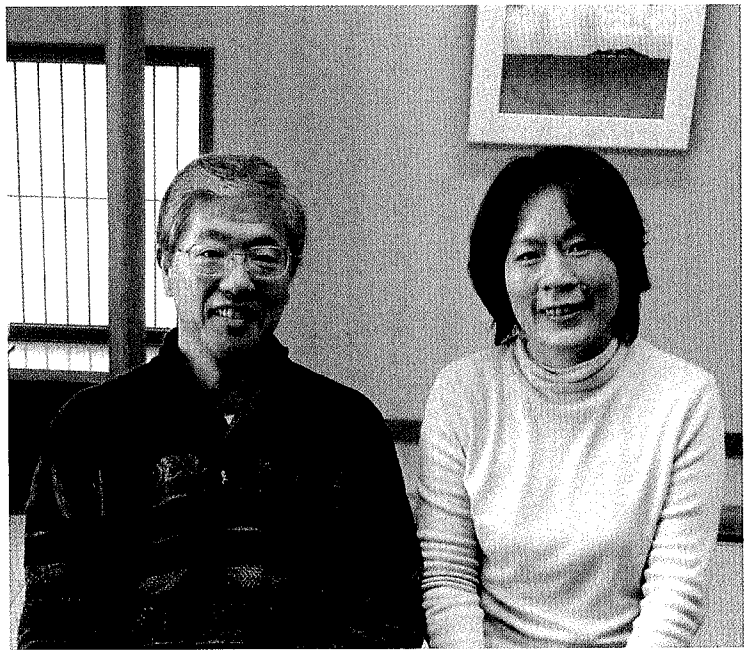
このようにして毎日、みことばに触れ、妻との祈りも深いものとなり、イエス様によって支えられました。五年間その会社に在籍していましたが、最後は不思議と仕事も人間関係もうまくいくようにされたのです。この五年間は、私にとって必要な時であり、必要な試練であったとわかります。現在はまた別の会社に勤務していますが、その会社とも取引関係にあり、公的にも私的にも関係が継続しています。

本当にイエス様は私たちの必要をすべて満たしてくださり最善へと導いてくださいます。そのイエス様に信頼して祈りつつ歩んで行きたいと思います。

松本昭二
一九五五年生まれ、山口県出身
岩国市立通津小、中学校、山口県立柳井商業高校卒
新日本製鐵（株）を経て、現在　鈴木住電ステンレス（株）執行役員、中西部支店長

憐れんでくださるイエス様

松本　真知子



夫の昭二さんと

昨年（二〇一二年）私は、罪の赦しと永遠のいのちについて、個人的な体験を通して主から大きな恵みと喜びをいただきました。今回その二つのことについてお証しさせていただきます。

1　永遠のいのち（姉の召天を通して）

私は五人姉妹の末っ子で、上に四人の姉がいます。二〇一二年六月に、すぐ上の姉が五十八歳の若さで召されました。姉は八年前に乳がんが見つかり、その手術の一年後に広島喜びの集いに初めて導かれ、素直にイエス様を受け入れました。

姉は、集会に集ってはいませんでしたが、私が送る冊子やCDをとても喜び、「また送ってね」と心待ちにしてくれていました。手術後は仕事もして、平安に穏やかに暮らしているようでした。骨に転移してもそれは変わらず、心配して電話をかけると、いつも元気な声が返ってきて、反対に私の体調を心配してくれました。

しかし、そんな姉も腰痛がひどくなり仕事もやめることになったと聞いて、「一緒に祈りたい、そして天国を確信して残された時を平安に過ごしてほしい」という願いが私の心の中に日に日に増していきました。その祈りにイエス様は応えてくださり、召される三か月前に二泊三日の予定で訪ねることができました。

姉四人はみんな山口県に住んでいます。ですから私の帰省を楽しみに待っていてくれて、一緒に宿泊できる所を予約してくれるのです。その時も久しぶりに同じ部屋に宿泊し、思い出話がはずみました。久しぶりの姉たちとの楽しい時間でしたが、「いつ姉に話せるのだろうか、このまま姉と祈ることもできずに帰ることになるのだろうか」と私の心は思い煩いでいっぱいでした。結局その日は何も言い出せずに終わりました。

その夜、正直に「せっかく導いてくださってここまで来たのに、本当に申し訳ありません。私の心は臆病と人を恐れる気持ちに支配されています。姉たちを前にすると、大胆にあなた様のことを証しする勇気もでてきません。みこころでしたら姉と二人きりになる時間を与えてください」と祈りました。死を前にした姉に天国の話なんて不謹慎だ、と他の姉たちがきっと思うだろうし、止められるに違いないと思っていたので、二人きりでなければ無理だと思ったのです。そして翌日、イエス様は祈りに応えてくださり、二人きりの時が不思議な方法で二時間近く与えられました。しかしその時が与えられても、伝えたいことが口から出てきません。ひたすら心の中で「イエス様が語ってください。ただイエス様のご栄光が見たいです」と繰り返しつぶやいていました。そして、そんなつぶやきの中で自然に口から出たのは、「一緒に祈りたいんだけど祈ってもいい？」という言葉でした。こうして姉と二人で祈ることが実現し、祈りの中で永遠のいのちのことや主から与えられる平安など、伝えたかったことがすべて言葉になって出てきました。不思議な体験でした。

御霊も同じようにして、弱い私たちを助けてくださいます。私たちは、どのように祈ったらよいかわからないのですが、御霊ご自身が、言いようもない深いうめきによって、私たちのためにとりなしてくださいます。（ローマ　8・26）

祈りの後、「私は死ぬのは全然怖くないよ」と姉がはっきりと笑顔で答えてくれました。姉は「私はね、死ぬときはひとりじゃないと前から漠然と思っているのよ」と何度か口にしていました。そしてこの日も同じことを言いました。この時はあまりに

はっきり断言したので、姉が召される前に再臨があってみんなで天国かしら、と思ったほどでした。そして三か月後、二番めの姉から電話があり、姉の状態が急変して入院したと知らされました。そんなに長くない様子だということもわかり、しばらく病院に泊まり込みで付き添う予定で山口に帰りました。

三か月前に会った時の姉は、出された食事をすべて食べ切るほど元気でしたが、その面影がないほどに変わっていました。「お姉ちゃん、来たよ」と声をかけると、「ありがとう。大丈夫?」と、この時に至っても私のことを心配してくれました。姉の耳元で聖書の詩篇23篇を読んで祈りました。そして翌日、他の姉たちも一緒にいた時のことです。姉は苦しそうな呼吸でうわごとのように、「空いちょるかね?空いちょるかね?」と何度か言いました。山口弁で「空いているか?」と尋ねたのです。私は天国の場所が空いているのか聞いている、と確信したのですが、驚いたことに一緒にいた二番めの姉が私に向かって、「これって今から行く場所(天国)が空いているか聞いているんじゃないの?」と言ったのです。召された姉が「空いちょるかね?」と尋ねたことも驚きでしたが、それ以上にこの姉が私に言ったことが驚きでした。

私は姉たちに天国の約束についてあまり大胆に語ったことがありませんでした。ただこの姉たちも一回だけ広島の喜びの集いに導かれていて、その時にベック兄とお交わりしていただいています。そして送った書物などを読んでいてくれたのでしょうか。イエス様は私たちの思いを遥かに超えて導いてくださるお方だということをまた新たに覚えました。

その日は私が付き添うことになり、二人きりで祈りと賛美の時間を過ごすことができました。その時は肺も悪くなっていて、痛みより呼吸の苦しさのほうが強く、見ているのが辛くなるような状態でしたが、手を握って祈ったり賛美したりすると、不思議と呼吸が楽になって穏やかになります。私が睡魔に負けてうとうとすると、また姉の苦しそうな声ではっと目覚め、祈りと賛美でまた穏やかになるという繰り返しでした。本当にイエス様がご臨在してくださることをはっきり体験しました。明け方、姉のあまりの苦しみを見て思わずイエス様に叫びました。「姉はこんなに苦しんでいます。いつこの苦しみから解放され、あなたのもとに引き上げてくださるのでしょうか?」そう祈らずにはいられませんでした。叫ぶ思いで聖書を開くと、

次のみことばが目に飛び込んできました。

あなたは人をちりに帰らせて言われます。「人の子らよ、帰れ。」まことに、あなたの目には、千年も、きのうのように過ぎ去り、夜回りのひとときのようです。あなたが人を押し流すと、彼らは、眠りにおちます。朝、彼らは移ろう草のようです。朝は、花を咲かせているが、また移ろい、夕べには、しおれて枯れます。(詩篇 90・3〜6)

「イエス様、今日なのですね」という驚きと共に、不思議な平安と静けさの中でこのみことばを受け取りました。前日の「空いちょるかね?」という問いにイエス様が答えてくださって、「帰っておいで」と言ってくださっているのだと思わされました。そしてみことば通り、その日、愛する家族全員に見守られて天に召されました。

また、神ご自身が彼らとともにおられて、彼らの目の涙をすっかりぬぐい取ってくださる。もはや死もなく、悲しみ、叫び、苦しみもない。なぜなら、以前のものが、もはや過ぎ去ったからである。(黙示 21・3〜4)

姉の顔は本当に平安そうできれいでした。他の姉たちもその顔を見て「よかったね、よかったね」と言いながら、召された姉の頬を撫(な)でていました。主はすばらしい、としか言えませんでした。姉がよく言っていた「死ぬときはひとりじゃない気がする」という言葉は、本当にそうなりました。イエス様が召してくださったことが確信できました。この姉の召天を通して、私はイエス様を信頼しきれていない自分に気付かされ、深く悔い改めました。「行く場所が空いているか聞いているんじゃないの?」と言った二番目の姉も、目の前で苦しんでいる姉を見て「可哀想にね〜、いつまで苦しむんだろうね」と言っていました。その時、召される日は今日だとみことばをいただいていたのですが、姉にそのことを言って、もし今日ではなかったら…という思いが頭をかすめて言い出せませんでした。「実はね…」と、その詩篇90篇3〜6節のことを話したのは、姉が召された後のことでした。また、この姉が、病

室で苦しむ姉の眉間にしわがくっきりとあるのを見て、「召された後も、この辛い顔のままなのかなあ」と心配していたことに対しても、「大丈夫、しみもしわもなくなるから」と言いたかったのですが、苦しみがあまりに酷かったので、もしこの苦しそうなままだったら…と恐れてしまい、それも言えませんでした。私はこのようにどこまでもイエス様に信頼しきれない者ですが、イエス様はご真実なお方です。私にさえ、みことば通りに応えてくださって、ただただ感謝しかありません。

そして姉の長男が私に教えてくれました。「お母さんが布団の中で聖書を読んでいるのをよく見かけたよ」と。姉が最後までイエス様に頼っていたことが分かり、喜びが増し加えられました。義兄や三人の子どもたちの救いもイエス様の御手の中にありますので、感謝しつつ祈って行きたいと思います。時々ふと寂しくなることがあります。しかし、それはこの世で会えない寂しさであって、天国でまた会えるのを楽しみにしています。

2　罪の赦し（夫婦の問題を通して）

昨年いただいた恵みのもう一つは夫婦の問題を通してでした。夫婦というより、私自身の心の中の問題です。

私たち夫婦はいわゆる職場結婚です。結婚して三～四年経ったころ、夫の女性問題がありました。その何年後かに吉祥寺集会に導かれましたが、それまでは夫のしたことが許せなくて、事あるごとに嫌味を言ったりしていました。

二十数年前イエス様によって救われ、共に祈り合える夫婦に変えていただきました。しかし救われたからといって記憶がまったく消えたわけではありません。主人を責める思いはイエス様が取り上げてくださって、解放されていたにもかかわらず、時々その当時の悲しく辛かったことが思い出されてきて、私を苦しめました。年月が経てば記憶は薄れていくはずなのに、そうではありませんでした。それは夫婦喧嘩をした時とか、主人に不満がある時とかにではなく、本当に思いがけなく襲ってくるのです。なぜこんな時に？と不思議なくらいでした。巧妙なサタンの攻撃だと思います。そしてこの問題は夫に相談するわけにもいかず、突如として襲いかかるものですから、その都度イエス様に祈るしかありませんでした。そして自分の記憶がなくならない限りこの事実からは解放されないのだと思い込んでいました。

わたし、このわたしは、わたし自身のためにあなたのそむきの罪をぬぐい去り、もうあなたの罪を思い出さない。

（イザヤ　43・25）

救われた当初、罪をもう決して思い出さないと言ってくださるイエス様に、心から感謝しました。けれども過去を思い出してしまう自分を見る度に、「愛するイエス様、私はこんなに何度も昔の記憶がよみがえってきてしまいます。おそらく私の記憶がなくならない限り、思い出さないことは不可能だと思います。あなた様は罪を決して思い出さないと言ってくださいますが、どうしてそんなことが可能なのでしょう」と、イエス様に向かって訴えていました。今思えば恥ずかしい限りです。

昨年の秋、ある姉妹が証しの中で、ご夫婦の問題で辛く悲しい思いをされたことを話されました。それを聞いてはっとさせられました。主人の単身赴任の八年の間、一度も過去の記憶に捕らわれずに過ごしていたのです。驚きと喜びと感謝の気持ちが溢れてきました。

夫が単身赴任になった時から昨年の九月に名古屋に戻ってくるまで、一緒に暮らしたいと何度となく祈っていましたが、いろんな事情で閉ざされていました。その時には、なぜですか？という思いがありましたが、この年月が必要であり、それが主のご計画だったのだと、今は思わされています。一緒に暮らしている八年ではなく、離れて暮らしている八年だったからこそ、主に不可能はないということをなお強く思わされました。そして、「過去を思い出さない」という体験をさせてくださったことを通して、罪を二度と思い出さないと言ってくださるご愛を、疑いようのない事実として受けとることができました。

主のすばらしさを味わい、これを見つめよ。幸いなことよ。彼に身を避ける者は。主を恐れよ。その聖徒たちよ。彼を恐れる者には乏しいことはないからだ。（詩篇　34・8～9）

松本真知子
一九五五年生まれ、山口県出身
光市立浅江小学校中学校、山口県立光高等学校卒

キリスト集会へのご案内

牧師制度がありません

キリスト集会には牧師制度はありません。
いろいろな職業のかたが自発的に責任を分かちあい、いっさいの強制はなく、
純粋に聖書のみことばのみに立ち、主だけを中心とする交わりを大切にするひとびとの集いです。

組織も、会則もありません

キリスト集会には役員会も、総会も、定例会儀も、会則もありません。
みなが助けあって重荷を分かちあい、すべてが自発的によろこびをもってなされます。

会員制度がありません

会員として登録されるような、いわゆる会員名簿にあたるものはありません。
出入りは自由であり、宗教団体的な制度はいっさい排除して、
主ご自身のみを頭とし、主ご自身のみが満ち満ちておられることを祈り求めている集会です。

献金制度がありません

月定献金、年定献金などの献金制度はなく、すべての献金は自発的に行われ、
無記名ですからだれがいくらささげたかは主のみがごぞんじです。

日曜礼拝

祈りと賛美がつぎつぎにささげられ、主の十字架のあがないの血潮を覚え、
パンとぶどう液にあずかります。
あらかじめ決められたプログラムはなく、主に示されるままに各人が祈り、賛美します。
礼拝の後は福音集会で、兄弟によって主のみことばがとりつがれます。

家庭集会

家庭で開かれる集会で、兄弟によるメッセージ、兄弟姉妹による証しがあり、
福音の喜びをつたえる集いです。世界で百カ所以上あり、多くのところで日曜礼拝が行われます。

よろこびの集い

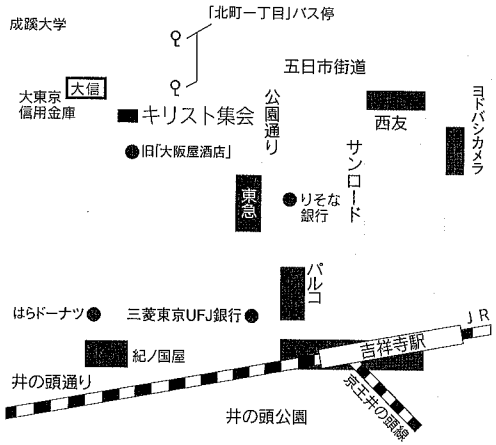
西軽井沢国際福音センターはじめ世界各地で開かれ、全国の人々が集まる大きな集会です。
快適で経済的な宿泊施設を利用し、ほとんど毎週どこかで開かれます。

吉祥寺キリスト集会

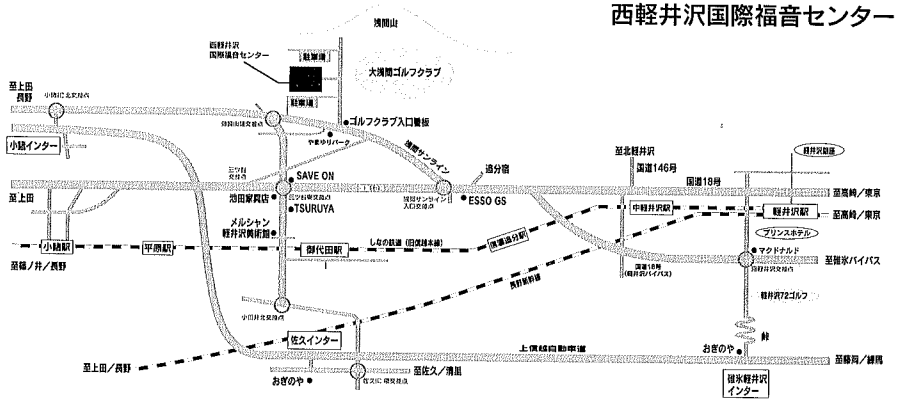
東京都武蔵野市吉祥寺本町4−9−11
[電話] 0422-21-8450（集会所）

日曜礼拝・福音集会

	10:00 / 18:30
火曜学び会	11:00
木曜祈り会	19:00
子供日曜学校	9:00
中高生日曜クラス	9:00



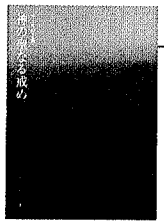
西軽井沢国際福音センター



西軽井沢国際福音センター
[電話] 0267−32−6400
長野県北佐久郡御代田町塩野450−15　〒389−0201

西軽井沢国際福音センター・ゲストハウス
[電話] 0267−32−6444
長野県北佐久郡御代田町塩野450−33　〒389−0201

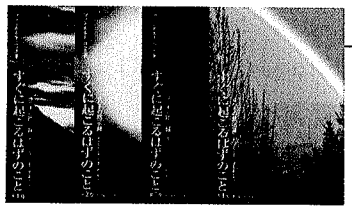
■しなの鉄道で御代田駅下車。タクシーで約5分（1000円程度）徒歩45分＝3km
御代田へは東京駅より長野新幹線「あさま」にて軽井沢駅下車、しなの鉄道に乗り換えて三つ目の御代田駅下車。
■ 周辺の道路に車を駐車させることは禁止されていますので、厳重にお守りください。



モーセの十戒　神の聖なる戒め

ゴットホルド・ベック著

モーセの十戒は約三千五百年前、主がモーセを通してイスラエルの民に告げられた「十の戒め」です。そこには「聖なる神のみこころ」が現されています。ですから、当時のイスラエル人だけでなく、あらゆる時代の、すべての人間に対する訓戒と言うことができます。そして、この戒めを真剣に受け止めるとき、人間は自分の罪深さを思い知らされ、罪の問題の解決を願ってイエス様による救いに導かれる、という恵みに与ることができます。ところが、この大切な「聖なる戒め」が、今はほとんど無視され、軽んじられています。それは近年の社会秩序の乱れとも無縁ではないでしょう。こういう時代であるからこそ、「十戒のメッセージ」に心の目を向ける必要がある、と思います。キリスト集会の雑誌「主は生きておられる」が創刊号から12回にわたって「モーセの十戒」を連載し、それを単行本にまとめた理由もここにあります。



すぐに起こるはずのこと―ヨハネの黙示録（第1～4巻）

ゴットホルド・ベック著

ヨハネの黙示録は、初代教会で何よりも大切にされました。しかし、黙示録の内容と文章は、現代の私たちには難解なところがあり、誤読も多く、霊的に正しく読み解くことは困難になっています。しかし、この黙示録の中にこそ、末の世にある私たちにとって、何よりも必要なことが示されているのです。私たちはこの黙示録に、もっと注意を向け、深く深く読みこむべきではないでしょうか。この本は、吉祥寺キリスト集会の学び会で、約1年半ほどの間に行われたベックさんのメッセージをまとめたもので、第1巻には黙示録の1～3章、第2巻には4～7章、第3巻には8～15章、第4巻には16～終章までが、それぞれ収められています。



光よあれ　―私たちは主のもの

証しシリーズ（第1～9集）

いかにしてイエス様に出会い、救われたか、またそれによって、人生がどのように変わり、重荷から解放され、よろこびと平安の日々を生きることができるようになったかを、多くの方々が証しされています。第1集から第9集まであり、実に596人の方々がそれぞれの人生と主にあるよろこびを感動的に語っておられます。

※主のご再臨が近づくいま、すべての本を100円で配付しています。
お気軽にお申し込みください。

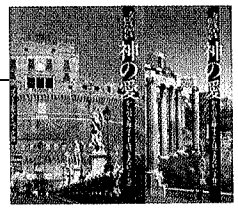


実を結ぶ命　がんにうち勝ったドイツ少女リンデ

ゴットホルド・ベック編著

二十歳そこそこのドイツ少女リンデが、がんであることを知りながら、自分の死をかくも冷静に受け入れることができ、すべてを感謝し、自分の思いは少しも求めずに、喜びつつ召されていったというこの事実は、現代の奇蹟であり、神の実在を証しする一つの大きな証拠です。

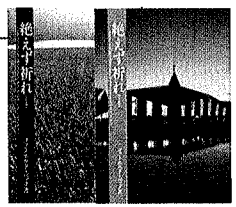
「永遠の愛をもって、わたしはあなたを愛した」（エレミヤ31・3）リンデの、主に従い通す態度は、キリスト集会の中に生き生きとしたリバイバルの波を起こし、多くの人々が自分の支配権をイエス様に明け渡し、そしてただ神のみことばにのみ拠り頼む者へと変えられています。なおこの本は韓国語版、ドイツ語版、英語版が出版されました。



なにものも私たちを神の愛から引き離すことはできない（上・下巻）

ゴットホルド・ベック著

吉祥寺キリスト集会でのベックさんの聖書の学びのうち、「ローマ人への手紙」1章から8章までを上巻に、9章から16章までを下巻にまとめたものです。聖書に初めて接する方、信仰の歩みを始めた方のために分かりやすく書かれていて、全体は第1章から順を追って学ばれていますが、一つ一つのメッセージが深い霊的な内容を持ち独立しているため、どこから読み始めても、豊かな恵みが私たちの心に注がれます。私たちが神様のみことばに目覚め、救われるためには、たった一つの聖句でも十分でした。しかし、さらに成長していくためには、多くのみことばが、聖書全体が必要です。この本は、聖書を「研究」するためではなく、日々の生活においてさらに深く主のみことばを味わいたいと願っておられる方々のために、すばらしい励ましとなると信じております。



絶えず祈れ（上・下巻）

ゴットホルド・ベック著

主は私たちが祈ることを望んでおられます。主なる神は、あふれるばかりの祝福を、私たちに注ごうとしておられるからです。祈りこそ神の富のための鍵なのです。そして信仰は、祝福が私たちのうえに注がれる扉を開けるのです。祈りの本当の大切さをよく知ることができれば、まだ救われていない方々はイエス様のみもとに導かれ、また、すでに救われている方々は、いまよりもさらに何倍もイエス様に祈るようになるにちがいありません。そして、私たちが主に祈るための励ましとなるのが、この「絶えず祈れ」の上巻であり、下巻です。「絶えず祈れ」、「まことの祈り」、「祈りへのまねき」、「真剣な祈り」、「祭司としての奉仕」、「イエスのみ名によって祈る」、「祈りのかぎりない可能性」などのメッセージが収められています。

キリスト集会の本、雑誌などの注文はハガキで下記迄。電話での注文は、お控えください。

注文先　〒180－0004　東京都武蔵野市吉祥寺本町　4－9－11　吉祥寺キリスト集会

集会の出版物

主は生きておられる
Unser HERR lebt

Unser HERR lebt
主は生きておられる

主は生きておられる　第30号

定価100円（本体95円）2013年10月15日初版

編集長	ゴットホルド・ベック
編集スタッフ	清水洋一　古田公人　田中順治　福留伸子　石塚稔成　石塚優子 岩本秀造　岩本範子
デザインスタッフ	石黒郁彦
写真	鈴木力
題字デザイン	飯守恪太郎
印刷	新生宣教団
発行所	キリスト集会

今回も多くの方々から写真の提供をいただきました。
勝手ながらお名前は省かせて頂きます。
ご協力ありがとうございました。

